
YOU あなたに会いたくて

雪乃 静

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

YOU あなたに会いたくて

【Nコード】

N4662I

【作者名】

雪乃 静

【あらすじ】

同僚で友人の保坂に誘われて行った“スナック・ルージュ”で、修司は優和に一目惚れをした。しかし、優和には思い続けている人がいることを知って、告白できずに遊び友達を決め込んでしまう。ただ、修司の“好き”という思いが優和の誘いを断らず、二人は“DONDONドーナツ”で待ち合わせをするようになる。そして優和の転勤。その年のクリスマス・イブに再会するも、それ以降音信が途絶え、修司は失意のうちに東京へ。修司の東京での生活はグダグダだったが、ある日、そんな生活の中に一通のポストカードが届

けられた。裏には藤井優和の名。音信が途絶えてからもう五年。そののがきの名に、修司は楽しくもせつない過去が思い出される。「でも」、「なんで今になって……」。そののがきの住所は修司の知るものではなく、電話番号も書かれていない一方で、「あなたに伝えたいことがあるの」、「だからお願い。今度、会ってもらえますか?」、「私、待ってます」、「クリスマス・イブに、いつものドーナツ屋さんで、七時に」とある。はがきに綴られたその言葉が気になり、修司は優和に連絡を取ろうと、優和の親友の友花に、はがきに記載されていない電話番号を訊こうとした。しかし、返ってきた返事は「ごめん、今は話せないの」だった。

一通のポストカード

「じゃあ、出してくるね」

「お願い」

シーズン真つただ中のこの山頂は、登山客で賑わっていた。時折吹く風は、疲れ切った体を癒し、心地よかった。

学生の頃は、何故か夏になると気持ち弾んだものだ。なににやりたいのか、なにをしたいのか、なにができるのかも分からないまま、ただ自分の将来、未来が華やかなものと信じた。自信をみなぎらせた。思春期も重なって、異性とのドラマチックな出会いを妄想した。どういうわけか、この時期になると、そんな希望に満ち溢れた感情が湧いてきた。夏の青い空と、もくもくと立ち上る真つ白い入道雲を見上げるのが好きだった。しかし、今の僕には、ただ暑い

だけの季節でしかない。ただ暑いだけの毎日でしか。

仕事を終え帰宅すると、ドアに備え付けのポストからダイレクトメールなどの郵便物を取り出し、一日の汗を流すためシャワーを浴びた。バスタオルで濡れた髪と体の水滴を拭いトランクスを穿くと、缶ビールを片手にテレビのスイッチを入れ、ソファアに座る。テレビから流れてくる声をBGMにビールを一口、特に見たい番組はないが習慣になっていた。

ダイレクトメールに目を通すと、あれもこれも、どうでもいいものばかりだった。保険会社からの通知、自動車ディーラーからの土日のイベント開催のお知らせなど、いつもの常連達が並んでいる。なかには、お墓買いませんか？ なんてものもある。僕には先祖代々続いている墓があるから必要ない。

「富士山？ 誰からだ？」

富士山を写したそのポストカードは、そんな郵便物達の中に紛れ込んでいた。裏には君の名があった。

藤井優和と。

初めて見る優和の字は、決してバランスのいいものではなかったが、思いがけず目にした名前は、僕の中の一番深い所に押し込めていた優和への思いを呼び起させた。

修司、お元気ですか？

優和は今、富士山の頂上にいます。驚きましたか？

隣には友花が一緒です。空は青いそうです。

いつか修司、言ってたよね。「富士山の頂上は夏でも寒いんだよ」って。

でもね、日差しが強いせいか、結構暑いよ。

本当は修司と一緒に登りたかったんだけど…。約束だったもんね。

でも、会えなくなっちゃって…。

そうしたら友花がね、登ろうって誘ってくれたの。

修司、私ね、あなたに伝えたいことがあるの。

だからお願い。今度、会ってもらえますか？

私、待ってます。

クリスマス・イブに、いつものドーナツ屋さんで、七時に。

八月三日 富士山

頂にて

はがきには、そう綴られていた。

「そうかあ、富士山に登ったんだあ」

そういえば、いつだったか平の展望台から富士山を見ていて、夏の山頂は暑いのか寒いのかで盛り上がったことがあり、「それじゃ、行って確かめよう」と約束したことがあった。

「…覚えてたんだあ」

溢れ出る優和への思いに、共にいた時間がよぎる。しかし、何故か具体化されない不安もまた、感じずにはいらなかった。

「もう、五年か…」

「なあ、今夜空いてるよな？ ちよっと付き合っただけで、欲しいんだけど、

「いいよな」

暖かくなつたせいも、同期の保坂はなんだかルンルンしているようだった。ぶつきらぼうを装ってはいたが、あきらかになにかに浮かれている。

「今夜つて、何処行くんだ？」

「ちよつとな。中ちゃんの行ったことのないところだよ」

「いいじゃん、明日休みだろ？」

ニヤツとしたその顔は、既に僕の強制参加を決めていた。

「なあ、本当に何処行くんだ？ まさか風俗じゃないよな」

僕はこれまでに風俗に行ったことがなかった。だからといって、べつに行きたいとも思わない。どうも僕はその手の場所が苦手なのだ。本当に。

「大丈夫だつて。中ちゃんが思ってるようなところじゃないから、心配すんなつて。ただ、酒を飲みながら人に会うだけだから」

「接待か？」

「なわけないじゃん。遊びだよ、遊び。いいから、ついてこいって」

保坂は僕の両肩をつかみ軽く揺ると、返事も聞かずに何処かに行ってしまった。

「あ、ああ」

僕は断わるタイミングを失い、独り言のように保坂のいた空間に渋々了解した。

「うん」

僕と同期の保坂は、入社二年目には既にトップ争いをするほどの営業所内でも成績優秀な奴だった。しかし、それを鼻にかけることは全くなく、強引で自分勝手なところはあつたが、人の力になることを拒まず、なによりも、成績がどうか、そういうことで人を判断する奴ではなかつた。所内にはそんな保坂を嫌う人達もいたが、そういう人達にも自ら進んで親しく話しかけるような奴だった。

所長は日頃から、「女の一人も落とせない奴は、なに売つても駄目だ」と、所内に檄を飛ばしては保坂を絶賛していたが、所長の言

う保坂の“落とす営業”ができなかった僕を、「自分にあつた営業をすればいい」と励ましたのも保坂だった。

僕は、仕事ができても気が配りが利き、顔がよくて女性にはなに一つ不自由しなかつた保坂と、何故か昔から気が合つた。

保坂に連れられてタクシーで着いた場所は、住宅街から少し離れた所にポツンと一軒だけあるスナックだった。ピンク色の壁がネオンに照らされており、店の前のプランターには赤や黄色の花が咲いている。光るネオンには“スナック・ルージユ”の文字。あまり大きな建物ではなかつた。

僕は緊張した。保坂の言うとおり、確かに行つたことのない所だったからだ。居酒屋ならよく行く、カラオケにもよく行く。僕が自宅以外の場所で酒を飲むといえば、せいぜいそんな所だった。

「おい、行くぞ。なにしてるんだよ、早く早く」

保坂は尻込みをして突つ立つている僕を急かすように手招きをすると、僕が一步踏み出した時には、もう、店のドアを開けていた。僕は遅れないように小走りですぐ後に続いた。

ドアの向こうには重厚そうなドアがもう一枚あり、そのドアからはカラオケが遠くに聞こえている。右側の棚を見るとグレーの公衆電話と、その脇には一輪の黄色い花が花瓶に挿してあつた。

特に花に詳しいわけではないが、この花が外のプランターの花と違うことくらいは分かつた。

ドアを開けると遠くに聞こえたカラオケが、騒音となって僕の鼓膜をひどく振動させ、通り過ぎていった。

「わー、真ちゃんお帰りー」

騒音の中に笑顔があった。

「ママ、ただいまー」

保坂が両手を前に広げて答える。その声は今まで聞いたことのない甘えた声だった。まるで赤ん坊が母親に抱っこをせがむような。

僕はその後ろで鳥肌が立つのを覚えた。

「真ちゃん、こっちでもいいかな」

店内を見渡すと、二つあるテーブル席は既に一杯だった。

「うーん、ま、いっか」

保坂はママに促されるまま、入り口側から三番目のカウンターの席に、僕はその後を追って二番目に腰を下ろした。

お世辞にも広いとは言えない店内は、フロアを挟んでテーブル席とカウンター席に別れていて、カウンター内に比べると、フロアとテーブル席は遥かに少ない光量と間接照明を光源としていた。そして、二つのスポットライトで照らされたデュエツトをするには少々きついのではと思われるカラオケステージは、壁に沿って二つのテーブルと三つのテーブルがL字に配置された角の部分に位置し、イスが一つ置かれていた。

そのイスに座って熱唱している中年男性の歌声を全身で受け止めていると、騒音はやがてカラオケへと戻った。

「真ちゃん、なににする？」

「とりあえずビール。あ、それとなにか腹に溜まるものも」

「オツケー。真ちゃん、隣の方も同じでいいかしら？」

「うん」

「あっ、そうだママ、紹介するね。同期の中山君です」

「中山です」

ママはテレビドラマに在りがちな派手な髪と身形をした女性ではなく、後ろで束ねた黒髪には艶があり、真珠のような光沢を放つ純白のシャツを着た品のよさそうな細身の女性で、たとえ四十代であっても、三十代前半と言ってなんの違和感も感じられない年齢不詳の綺麗な人だ。

「へえー、二人は同期なんだ。私てつきり、真ちゃんの先輩の方だと思っちゃった」

ママは中瓶のビールを保坂のグラスに注いで、二度三度、僕達を見比べた。

僕はムツとした。確かに僕は大抵の人から年齢より老けて見られる。だから保坂の先輩に観られても仕方がない。でも、初対面なのに本人を目の前にして言わなくてもいいはずだ。しかもこんな僕でも、一応客なんだ。僕はこの店に来たことを後悔した。

そんな僕のグラスにママはビールを注ぐと、今度はジーンと顔を見て、にんまりした。

「よく見るといい男ね、真ちゃんと同期ってことは、二十三？」

「はい」

「そっかー。あと十年若かったらねー」

「中山君、下の名前は？」

「修司です。修学旅行の修につかさです」

僕は不満を隠し、平静を装って答えた。

「中山修司。うん、いい名前ね」

「そうですね？ 普通ですけど」

「そんなことないわよ、いい名前よ。響きがいいわ」

ママが微笑む。

「響きが、ですか？」

「そう、響きが。なんとなくだけどね」

「なんとなくですか」

「うん、なんとなく。でもね、このなんとなくが大事なのよ。名は体を表すって言うじゃない？」

「はあ」

自分では有り触れた名前で、特別いい名前だなんて意識したことも、いい名前だとか響きがいいなんて言われたこともなかったため戸惑ったが、言われて悪い気はしなかった。

ママは腹に溜まるものを作りながら、さらに会話を続けた。その

会話は、なんだかよく分からないうちに、僕の中の“ムツ”を完全に消し去っていて、僕はいつの間にか笑っていた。もしかしたら、これがママの魅力なのかもしれない。

ママは僕達のグラスが空いているのを見ると、料理の合間を見計らって、すかさずビールを注ぐ。

いったいなにを作っているのだろうと思いつつ、巣で待つひな鳥のように僕達はでき上がるのを待った。但し、ひな鳥はビールは飲まないが。

「ごめん、もうちょっと待っててね」

僕達に両手を合わせると、「キュウちゃん、グラス空いてるじゃない」と、カウンターのもう一方の隅にいる、キュウちゃんと呼ばれる四十代から五十代と思われる男性のグラスにビールを注いで、幾つか会話をした後、再びせつせと料理を始めた。ママは忙しい人だった。

キュウちゃんはこの店の常連客で、いつも決まって同じ席に座り、ビールだけしか飲まない人だった。後に親しくなり、遊園地やスキー場に招待されたことがある。レジャー関係の仕事をしていると言っていたが、僕達総勢六人を招待できてしまう人だった。

しばらくすると、カレーのいい匂いができて食欲を刺激した。そうか分かったぞ、カレーライスだな。いやちょっと待てよ、ドライカレー、カレーピラフってことはないか？ などと、ご飯ものばかりを連想し、考えを巡らせた。

「はい、できたよー。でも、美味しいかどうかは分からない、つと」

目の前に置かれたのはカレーうどんだった。僕がよく行くカラオケ店では、腹に溜まるものといえば、ピラフとかピザ、パスタといったものしかメニューに見たことがなく、まさかこのような店でうどんが出てくるとは思わなかったし、聞いたこともなかったから、驚きと同時に新鮮でもあった。僕の認識とは、所詮その程度のものだったのだが。

僕はカレーうどんを、「ふー、ふー、ふー、チュルル、はー、はー、はー、はー、はー」と繰り返して、熱々のうどんと一心不乱に格闘した。

考えてみれば無理もない。昼に食べたつきりで、今までなにも食べていないのだから……。というのは嘘で、本当は保坂からもらったクッキーと海苔せんべいを三枚ずつと、のどアメ一個を食べていた。でも、それだけじゃ足りるはずもなく、僕は本能の赴くままに格闘家へと化した。

勝負は五分程で着いた。保坂も七分とかかかってはいない。空腹だったせいか、満腹にはならなかったものの、味はその道のプロも顔負けの旨さで大満足だった。腹の足しにと、とりあえず注文するのは贅沢なカレーうどんと言える。

「まあ速い、もう食べちゃったの？ もっとゆっくり食べたなら？」

誰もとって食べたりなんかしないのに「

「だってママのカレーうどん、旨いからさ」
ううう。

何度聞いてもこの甘えた声は、僕に鳥肌を立たせる。

「ありがとね、真ちゃん」

店内のカラオケは鳴り止むことがなかった。

「ヤッホー、真ちゃん」

カラオケが鳴り響く中、一服の清涼剤の如き声がし、保坂の背中に抱きついた。

「ヤッホー、ひとネエ」

保坂も愛想よく答えるが、ママの時のような甘えた声ではなかった。

「あれー？ 元気ないみたいね。あ、そっかあ、優和ちゃんまだなんだあ。でも九時過ぎてるし、もうじき来るよ」

優和ちゃん？ なるほどね、人に会ってそういうことか。保坂

らしい。

ひとネエは僕達がこの店に来た時からテーブル席で接客していた人で、二十六、七歳くらい、ママとは違ったタイプの美人だった。「あー、真ちゃん、もしかして淋しいんでしょう」

棚からグラスを二つ取り出し、それを片手で持つと、ひとネエは保坂をからかった。

「そんなことないよ。ママもひとネエもいるからさ」
懸命に強がる保坂が健気に見えた。

「そお？ 嬉しいこと言ってくれるのね。真ちゃんだけよ、そんな嬉しいこと言ってくれるのは。ねえねえ、隣の彼は？」

「ああ、同期の中山」

「どうも、中山です」

「中山ちゃんね。私、ひとみ。ヨロシクね」

「はい」

「オーイ、ひとみちゃん」

テーブル席から催促が来た。

「ハイ、今行くから」

「じゃあ、また後でね、中山ちゃん」

「真ちゃんも」

僕達に手を振ると、ひとネエは広くないフロアを小走りでテーブル席へと帰っていった。

ひとネエはこの手の店には不釣り合い？ な、爽やかな隣のお姉さんといった印象の、感じのいい人だった。

「真ちゃんも、って、俺はついでか？」

保坂は待ち人來らずで、顔には出さなかったが段々機嫌が悪くなつて、煙草の量も急速に増えていった。

「ママ、いつものにして」

保坂はビールを手酌し、一気に飲み干すと、空になったビール瓶をママに突き出した。

「真ちゃんは濃くていいのかな？」

「おもいつきり濃いやつね」

保坂の不機嫌度はどんどん上昇している。

「中山君は？」

「あつ、俺は薄く」

「薄くていいの？ 本当は飲めるんでしょ？」

微笑んで僕を見ると、僕達のグラスに焼酎を注ぎ始めた。

「優和ちゃん遅いねえ。いつもならもう来る頃なのに…」

ママはウーロンハイを作りながら腕時計に目を向けた。やはりママも気にしているようだ。

全ては保坂のせいだ。僕にはママが気の毒に見えた。

「はい、濃いやつと、薄いやつね」

僕は薄くと頼んだはずなのに、結構濃いのが来た。べつに飲めないわけではないから、濃くても支障はないのだが、僕としては段々濃くしていきたかった。

「これ薄いよ、ママ」

保坂は自分でグラスに焼酎を注ぎ足した。

「そんなことないよ、真ちゃん。ほらほら、今からそんなに飛ばしちゃって大丈夫？」

「大丈夫。俺は強いから、これくらい」

「そーお？ でも、優和ちゃんが来た時大変よ」

ママの忠告も聞かず、その後も保坂は一口飲んで注ぎ足し、また飲んで注ぎ足しを繰り返し、しまいにはウーロン茶の色がなくなり、グラスの中は焼酎百パーセントの状態になっていた。

「はい、真ちゃん。これ食べながら飲んで」

そんな保坂を心配して、ママが酒の肴を出してくれた。出てきたのは、ピーナッツ、アーモンド、カシューナッツ、ピスタチオ、さきいかの盛り合わせに、6Pチーズのてんこ盛り、そして揚げ出し豆腐だった。

僕は言われるとおりにチーズに手を伸ばした。さすがに保坂もママに従ってチーズをパクつくと、銀紙が残っていたらしく、面倒臭そうに、しかめっ面をしながら口をモゴモゴさせて摘み出した。

保坂をここまでのめり込ませた優和という女性に、僕は興味が湧いた。

まさか僕自身がこんなに好きになるとも知らずに…。

「ママ、ただいまー」

「優和ちゃん、真ちゃんがさつきから待ちくたびれてるから急いでママも痺れを切らしていたに違いない。カウンターの奥にある部屋に向かって呼んだ声には力がこもっていた。」

「はい、今行くねー。真ちゃん、あと一分待ってー」

ママの声とは裏腹に、あっけらかんとした声が返ってきた。

「うーん、いいよー。一年でも二年でも待つちゃうよー」

その声に、瞬時にデレデレの顔になった保坂は、声の方にデレデレの声で答えた。

待ちくたびれて機嫌の悪かったはずの保坂は、声だけでこんな有り様だったが、その横の僕もまた、初めて聞く君の声に緊張しつつも、顔は？ スタイルは？ などとイメージし、まだ見ぬ君を待ち続けた。

保坂はそれまでとは打って変わって何食わぬ顔で煙草に火を点けたが、その一本を吸うスピードは自己新記録を更新し、たちまち二本目に突入した。きつと、君が姿を見せた時、冷静でいる自分を見せようとしたのだろう。しかし周りの者にしてみれば、この行動は保坂の真意を表すバレバレの行動だった。

「ごめんねー、真ちゃん」

その三分の二程を吸った頃、君は胸元で元気一杯に両手を振りながら僕達の前に登場した。

ん？ なんだろう。今一瞬、動揺しなかつたか？

明るく元気なその声のトーンと、手を振るリズムの一部に、僕は微かに狂いがあったように感じた。

まあ、でも、気のせいか。

「真ちゃん、飲んでる？」

君が来る。

君が僕達の前に近付くにつれ、僕の視線もそれに比例するかのよう
うに落ちていった。

白いブラウスの胸元には、シルバーのハートが二つ並んだペンダ
ント・ネックレスが光り、クリスタルのような声と言うと在り来た
りな表現だが、凡人の僕にはこれ以外の表現は難しいそんな君に、
それ以上上げることができなくなった僕の視線は、ペンダント・ネ
ックレスとグラスの間を泳いだ。

「あつ、結構いつちゃってるね。ごめんね」

「バーカ、こんなの飲んだうちに入るかよ」

不機嫌に答えた保坂の声は、あきらかに上機嫌だった。

「さっすが真ちゃん」

「だろ」

保坂の声に、保坂の顔が目浮かぶ。僕は俯いたままにんまりす
ると、君に向けられない視線を保坂に向けた。

うん、確かに上機嫌だ。さっきよりも一段とデレデレ顔になっ
てる。

僕がその顔に呆れながら煙草を銜えると、白くて細い、しなやか
でいて可愛い指が現れた。

カチツ、カチツ。

スー、ハー。

「ありがとう」

「いいえ、どういたしまして」

カウンターの上で重ねられた両手から、ライターが覗く。

「真ちゃん、こちらの方は？」

「んん？ ああ、こいつ？ こいつは中ちゃん。同期の」

保坂は自分が誘ったのに、もう僕のことなんてどうでもいいようだった。

「中ちゃん？ もう、ちゃんと教えてよ」

「中山修司です」

僕は保坂は当てにならないと思い、自ら名乗った。

「…なかやま…しゅうじ、さん」

「…どんな字を書くの？」

「修学旅行の修に、つかさです」

「修学旅行の修に、つかさ。で、修司さん」

「そっか、修司さん、かあ…。修司さん、修司、修司、修司、修司、修司」

「パチン！」

「シュジシュジ」

君は手を叩き、僕を指差した。

「中山さん、シュジシュジね」

「う、うん」

「私、優和。藤井優和。よろしくね」

「ど、どうも…」

僕は出会って数分で、あだ名を付けられた。

「優和、“うた本”くれ。歌うから」

僕達のやり取りに嫉妬したのか、しかめっ面の保坂が割って入った。

「はい、真ちゃん」

君が“うた本”を手渡すと、とたんに保坂はデレデレ顔に戻り、

“え”のページから曲名を選曲し、番号を告げた。

「なっ、いい女だろ？」

保坂は曲番を送信している君に聞こえないように耳元で自慢した。

「彼女なのか？」

一番気になることだった。べつに訊いたところで仕方がないのだ

けれど、訊かずにはいられなかった。

それにしても、「なっ」て、なんだ？

「いや、彼女じゃない。友達かな。アプローチはしたんだけどさ、好きな人がいるんだってよ。片思いだけど忘れられないらしい。でもなあ、チャンスではあるんだよ。自信はないんだけどさ」

珍しいことだった。あの保坂が自信がないと言うのは。

「なあに？ 男同士で内緒話なんかして。私にも聞かせて？」

送信を終えた君が僕と保坂の内緒話に気付き顔を寄せてきた。

「ダメ。男同士の大事な話なんだから」

「じゃあ、シュジシュジ、教えて？」

「ダメ」

僕はグラスに視線を落したまま、話の内容を教えてあげたいという衝動を必死で抑え、保坂と同じ返事をした。僕にしてみれば茶目っ気を出して答えたつもりだったのだが、何故か罪悪感を感じてならなかった。“後悔先に立たず”。こんなことは初めてだった。

「そっか、残念。あっ、そうそう真ちゃん、二曲目に入ったよ」

「おう」

保坂はピーナッツを口に放り込むと、一気にグラスを空けた。

「シュジシュジも、なにか入れて」

僕の視界の中に“うた本”が差し出される。

「あ、う、うん」

僕の気持ちとは裏腹に、君は意外とあっけらかんとしていた。

「……………」

無言でページを捲る僕は、実は困っていた。歌うことは嫌いではない。カラオケ店に行つて何度も歌っている。でも、それは顔見知りの人達との場合で、知らない人の前で歌うのは初めてだったからだ。

「じゃ、じゃあ」

悩みに悩んで僕が告げたのは、結局十八番だった。

スーリー、フウーリー。

僕は君に気付かれないように大きく息を吸うと、慎重にゆっくり吐いた。

「シユジシユジのは五曲目ね」

「う、うん」

君は何故か保坂の前ではなく僕の前に立っていた。そして、この場で歌わなければならぬプレッシャーに加え、目の前の君に鼓動が速くなってグラスを空けるスピードが加速した僕に、その都度薄いウーロンハイを作ってくれていた。

相変わらず僕の視線はペンダント・ネックレスとグラスの間を行ったり来たりしていて、僕の瞳に映っていた君は、白いブラウスと胸元に輝くペンダント・ネックレス、それと両の手くらいだった。

一度だけ、僕はそんな君の隙を窺い、喉元まで視線を上げることにはチャレンジしている。しかし、そろそろにもかかわらず、誤って唇まで上がってしまうと、ドキツとして瞬時に元のテリトリーに視線を戻していた。

君の唇は瑞々しく、艶やかで、張りがあつて、それでいて柔らかそうだった。それは決して口紅の効果なんかじゃないと、一瞬のことだったが僕は断言できる。

やがて保坂が選曲した曲のイントロが流れ始めた。

「おっ、俺の番だ。ちよつと行ってくるな。優和、ちゃんと聞いてるよ」

フラフラしながら、保坂はマイクのもとへと歩いていった。

保坂はあまり歌は上手くない。自分では上手いと思っっているらしく、歌いながらフリを付けて格好よく見せるのだが、それが逆に滑稽に見えてしまう。

僕は振り返って、君のために格好よく歌っている保坂を眺めた。

その横のテーブル席では、ママとひとネエの接客している姿が見える。

僕の緊張は少しだけ穏やかになっていた。

「ねえ、シユジシユジ。真ちゃんて、あんまり上手くないよね」
今や騒音と化した歌の中で、カウンターに向き直ってグラスを傾けていると、君がそつと耳打ちをした。

この突然の出来事は、僕にこれまでにならないほどの緊張をもたらした。僕は全く視線を上げることができなくなり、ただ、「うん」と頷くのがやつとだった。

シャンプーと化粧の香りの中に、君の香りを感じた。何処か懐かしく、朝をイメージさせる香りだった。上手く表現できないのがもどかしい。

「シユジシユジ、私も飲んでいい？」

「う、うん」

「やったー」

僕が君の二度目の耳打ちに、背中で保坂の歌声を受け止めながらやつとの思いで答えると、君は嬉しそうにウーロンハイを作り始めた。

本当は顔を見たくて仕方がなかった。でも、僕の中の女性に対する緊張が、それを拒んでいた。これまで女性とあまり縁のない生活を送ってきたためか、自分の意に反して、僕は女性を前にすると、緊張して顔を見ることがすらできなくなってしまっただ。

しかし、そんな僕だったが、幸いにもその望みはすぐに叶うこととなった。

「シユジシユジ、乾杯しよ？」

「う、うん」

君はグラスを持つと、僕の前に翳した。

「じゃあ、せーの。かんぱーい」

「乾杯」

僕はグラスをそつと合わせた。

キン。

短い音が小さく響いた。

グラスの向こうに、僕を見る君の顔があった。

初めて見る君の顔は、逆光の光が邪魔をしてよく見えなかったが、君はその光を背に受け、まるで光のオーラを身に纏っているかのようだった。

僕のグラスを持つ手は空中に静止し、光の中の君の顔に僕の視線は時を止められた。

「… やつと優和の顔、見てくれたね」

「 シュジシュジ、ずっと下ばかり見てたから…」

俯いた君の少し悲しげな顔が、僕の中に飛び込んだ。

… こんな綺麗な人、本当にこの世にいるんだあ…。

「 そ、そんなことないよ、ずっと見てたよ」

君は分かっていたんだ。僕が君を見ることができなかったことを。

「 そお？」

僕の精一杯の言い訳に君は笑顔を見せると、再びグラスを翳した。

「 乾杯しよ？」

「 また？」

「 うん、また」

「 うん」

『 かんぱーい』

キーン。

重なった二人の声と共に重なり合ったグラスは、さっきより少しだけ大きく、そして、長く響いた。

僕の君への思いはどんどん大きくなっていった。しかし、大きくなればなるほど、保坂の「自信がない」の言葉が僕に重く押し掛かった。君には、片思いだけど保坂が弱気になるほどの好きな人がちやんといる。このことは僕にとって既に絶望を意味していた。

なら、せめて友達に…。

おこがましいのは十分承知している。でも、僕はこの出会いをた

だの客と店員で終わらせたくはなかった。

「おいおい、なに二人で仲よく乾杯してんだよ。俺も仲間に入れようぜ」

「優和、ちゃんと聞いてたか？ お前のために歌ったんだぞ」

歌いながら僕達のことを見ていたのだろう。保坂は席に着くと不満な顔をした。

「ありがと、真ちゃん。ちゃんと聞いてたよ」

保坂の飲みかけのグラスにウーロン茶と氷を足すと、君は笑顔で手渡した。

「そうか？ それならいいんだ。じゃ、乾杯な」

二人だけの乾杯に機嫌をよくした保坂は、営業で培った話術を駆使して君を楽しませた。

僕もつられて笑っていると、耳に馴染んだイントロが流れてきた。

「あつ、シユジシユジの曲だ。私、この曲好きなんだあ」

「そうなんだ。じゃあ、頑張っちゃおうかな。行ってくるね」

女性に対する緊張は、おそらく克服されてはいない。しかし、君に対する緊張は自然となくなり、イントロの中、僕はマイクへと向かった。

君は保坂の相手をしながら、歌う僕をずっと見ていた。

僕もそんな君に応えるように、君に向けて歌った。

「すごい。シユジシユジ、歌、上手いなだね」

歌い終わった僕を拍手で迎えると、君は“うた本”を手にした。

「ねー、私も歌っていい？」

君の声に、僕と保坂の声は揃った。

『いいとも…』

「優和、優和の歌も上手かったよ」

僕ははがきの文字に呟いた。

「そうかあ、結局、三年だったんだあ……」

「優和といわれたのは」

あの夜から三年間、僕の土曜の夜はルージユにあった。それはやがて後輩の市川を巻き込んで、明かりに群がる虫のように、いつしか暗黙の了解の如く、三人が三人共、優和に思いを寄せて集まるようになっていた。

夜通し、飲んで歌って大騒ぎして、閉店時間を迎えネオンが落ちると、優和はいつも僕と市川の乗ったタクシーに手を振って見送った。僕は振り返って手を振ると、市川宅経由で自宅に戻る。それが僕の土曜の夜だった。

僕はいつもタクシーの中で、虚しさ、切なさ、淋しさ、そしてなによりも不安を感じていた。それは優和が、「優和は俺が送る」と言う保坂に二台目のタクシーで送られていたからだだった。

何故、僕が保坂に「俺が送る」と言えなかったのか。それは僕がナンバー2だったからだ。ルージユに行ったのも、優和に会ったのも保坂が先で、僕はその保坂に紹介されたにすぎない。だから僕には保坂を出し抜くことも、勿論、優和の思い続ける彼を優和から消し去ることも考えられなかった。第一、僕はそんな器量なんか持ち合わせていない。ようするに、ナンバー2は誰が決めたわけでもなく、僕が勝手にその位置を作り、その位置に甘んじたものだった。しかし、これがもし後輩の市川だったら、「俺が送る」と強気で言えただろう。僕の中では、市川はナンバー3で、それは単に後輩だったからではなく、僕が市川をルージユに連れていったからだ。

市川は誰に対してもまめに動く奴で、僕も保坂も重宝していたが、その一方では女性を前にするとやたらと格好付けたがる。陰でプレゼントを優和に渡していたことを僕も保坂も知っている。保坂は、「あれじゃ、優和は落ちないよ」と、余裕で笑っていたが、それが計算高く見えていたのは僕だけではなかったはずだ。キユウちゃんに招待されたスキーの時も、遊園地でも、保坂が持ってきたカメラを手にしては、「俺、カメラ引き受けますよ」と、自ら進んでカメラマンを名乗り出たと思ったら、ちゃっかり優和とのツーショット写真を、しかもアップで何枚も撮っていたりする美味しいところ取りの奴だった。後日、集合写真や様々なスナップ写真の中に、数多くのツーショット写真を見付けた時は驚いたものだ。おそらく優和とのツーショット写真の数なら一番だろう。

そんな市川に対し、「ダメ」と言うこともできた。しかし保坂はそんなことには気にも留めないし、仮に僕が引き受けたとしても、僕には市川のように、あんなに多くの写真を残すことはできなかったと思うから仕方がないのだが、市川のそういう一面はどうもいまいち好きにはなれなかった。とはいえ、なんだかんだ言っても根本的に根のいい奴ではあった。

そういえば…。

僕は不意に机の上に立て掛けてある写真立てに目を送った。

「優和とのツーショットの写真って、あの一枚だけなんだよな」

「あの時たまたま持ってたカメラで撮った…」

僕が優和という時間に、優和を、そして僕達二人を写真に収めてこなかったのは、僕には日常の中で写真を撮る習慣がなかったからだった。

たとえ遊び友達だけの関係だとしても、優和は僕の日常の中にいて、そのことがごく当たり前のように感じていた僕には、その日常の中で優和を撮ることはなかった。そして、僕にとつての日常とは、毎日の生活の他に遊びも含まれていたから、みんなで行ったスキーも、遊園地も、二人だけで行ったいちご狩りも、日常の延長でしか

なく、優和を写真に収めることをしなかった。

僕が写真を撮るのは、せいぜい観光旅行の時の記念写真くらいなものだったのだ。

僕は何故か、優和との時間が永遠に続くものと錯覚し、優和がいることがごく当たり前のように感じていた日常を、実はないがしろにしていたのかもしれない。本当は、このごく当たり前の日常こそが大事だったのに。

ともあれ、今となってはもっともっと二人だけの時間を市川のように撮っておけばよかったと後悔している。このことがきっかけで写真撮影が趣味になった今の僕にとっては、造作もないことなのだから。

「なーかちゃん」

「うわああ、なに」

突然耳元に現れた保坂の声は上機嫌で、デスクに向かう僕に抱きついたその顔は、僕の顔のすぐ横にあった。

「なあ、明日の夜暇だろ？ 空けといてな」

「なにがあるんだ？」

「合コン」

保坂は何故か僕を指差すと、得意気にキツパリと決めてくれた。

「合コン？ ごめん、俺、パスな」

「えー、なんでだよ。頭数に入ってるのに」

「勝手に入れんな。俺にだって予定があるかも知れねえだろ」

「あるのか？ 予定」

「まあな」

「…そうかあ」

今の今まで上機嫌だった保坂の声は、少しガツカリしたものに変わった。しかし、僕の中には既に君しかいなかったから、一秒でも長く君に会っていたかった僕には、他の女性との合コンなんて有り得なかった。

「じゃあ…、しょうがないな。でも、優和、ガツカリするだろうな」

「…どういうこと？」

僕は保坂の言葉に戸惑ってしまったが、しかしそれ以上に“優和”という響きにドキッとさせられていた。

君に出会ってからというものの、僕は“優和”という名前に敏感に反応するようになっていて、この二週間、保坂の口から“優和”という名前を聞かされたたびに、僕はドキッとさせられてきた。ただ、このことは保坂には知られてはならなかったから、あえて素っ気なく話すようにしていたが、危うく表情に出るところだった。

「いや、実はさあ、優和の提案なんだよ、合コン。で、俺と優和で企画したんだけどさ」

僕の中では既にワクワクしていて、“合コン参加”に予定を変更していたが、自分の感情を悟られないように、素っ気ない態度を続けた。

「なんで優和ちゃんか？」

「お客さんとしてではなくて、友達として親睦を深めたいんだってさ、俺達と」

ワクワクがドキドキに変わってきた。

「ふうん、そうか。でも明日はルージユの日なんじゃないの？ 優和ちゃん」

「合コンの後、いつもどおりルージユだよ。俺達も一緒に流れよう

と思ってただけだな。行くんだっただんなら？ ルージュに。この前も俺より先に行って飲んでたもんな」

「やばい。もしかして感付かれてる？」

「べつにいいだろ、店が気に入ったんだから。それに俺の予定ってのはルージュに行くことじゃないよ」

「そうかあ。じゃあ、ルージュも休むのか？」

「場合によってはね」

「まっ、まずい。話の成り行きとはいえ、これは非常にまずい方向に進んでいる。なんとか軌道修正をしなければ、合コンはおるか、ルージュにも行けなくなってしまう」

「でも行けるようだったら行くこうとは思ってるけどね」

「こ、こんなんでいいのか？」

「早く終わるのか？ その予定って」

「まあ、予定って言ってもたいした予定じゃないからね。行くこうと思えば合コンにも行けるんだけど」

「えっ、ええー」

「じゃあ、どうする？ 行く？」

「うーん、どうしようかな」

「行くに決まってるんだろ。ほら、なにしてる。早く、行くと言え」

「行くこうぜ。優和も喜ぶし」

「そうだなあ…。じゃあ、行くか」

「よっしゃ、そうこなくっちゃ」

「ホッ。危うく土曜の夜を淋しいものにしてしまうところだった」

「保坂は上機嫌で自分のデスクに戻ると受話器を握った」

「断片的に聞こえてくる保坂の声とその表情から、受話器の向こうに君がいることが分かった」

「やっぱり、僕とは…」

「なにを期待したのか、明日はいつもより長く一緒にいられるし、友達になりたいという願いも叶って、本当は喜ぶべきなのに、僕は電話で話す保坂の顔を見ているうちに、それ以上にはなれないんだ」

と確信し、なんとなく切なくなつた。

「ごめん、優和。遅くなつた」

「いや、べつに。気にしないで。無理言つてんのは、こっちなんだから」

合コンの会場となる居酒屋に着くと、既に女性達は席に着いていた。

同じ幹事ということもあって、まずは保坂が君の前に座つた。その後を先輩達が自分の好みの娘の前にへと座り始めると、僕は出遅れて端から二番目の入り口付近の席になつてしまつた。隣には後輩の亀掛川きけがわが、そしてその向こうには市川が座っている。君と保坂はもう一つの入り口側。…君が遠い。しかも両脇の亀掛川きけがわと田中というのが、保坂に負けず劣らずのいわゆる二枚目で、営業方針も保坂と同じ道を行く後輩達だつた。悪い予感。できるだけ君の近くにいると思つていた僕は、営業所に三人しかいない後輩のうちの二人にまで出遅れていた。

営業所の彼女募集中の先輩後輩を集つての、居酒屋での合コン。この居酒屋の座敷席での二時間は、予想どおり僕にとって実に悲惨なものとなつた。

「藤井優和です。宜しくお願いします」

「小林友花です」

「河原なつみです」

自己紹介で十対十の合コンは始まつた。君しか見えていない僕には、他の九人の名前は右耳から左耳へと通り過ぎていくばかりだつたが、それは僕の前に並ぶ三人の女性達も同じのようだつた。目の

前の娘は僕の右隣の亀掛川と、左前の娘は左隣の田中と、そして右前の娘は亀掛川きけがわの隣の市川との会話に夢中になり、誰も僕に話しかけてはこない。かといって、やはり女性を前にして緊張していた僕には、その会話達に入っていくこともできず、開始早々、あつという間に一人だけ取り残された状態になってしまった。いくら君しか見えていないとはいえ、この状況はあまりにも辛い。

やっぱり賽の目は“不幸”の目だったようだ。

仕方なく、煙草に目の前の鶏の唐揚げとビールで、それでもなんとか周りの話に相槌を打ちながら、席替えのその時を待つことにした。君のそばにと。ただ、そんな僕の相槌すら、誰も聞いてはいなかった。

開始から一時間が経っても誰も動こうとはしない。これでは近くに行くことは到底無理。ただでさえ、君とは七人分の距離があるというのに……。

席替えタイム、早く来い。

僕は腕時計を気にするようになっていた。だが、待っても待ってもその時が来ることはなかった。

結局、僕は七人分の距離の君の顔を、周りの話に相槌を打ったり、煙草を吸ったりを繰り返し、唐揚げとビールをお供にチラ見するのが精一杯だった。

僕はもう、この後のルージュに思いを馳せるばかりとなっていた。やがて唐揚げもなくなり、いい加減アルコールも回ってきた頃、地獄のような合コンは終わりを告げた。

「唐揚げ好きなんですね」

おそらく僕の名前なんか覚えていないだろう。これが僕に向けられた唯一の言葉だったのだから。

「どうだった？ 合コン」

「最悪」

とは言っても悪い気分ではなかった。さあ、これから本番。ルージユが待ってるぞ。と、地獄のような二時間からの解放感で一杯だったからだ。

「そうだよな、俺も先輩達が気になって楽しめなかったんだ。やっぱり先輩達を呼んだのは失敗だったな」

「かめ亀と田中もな」

「そうだな」

「じゃあ、合コンの分もパーっとルージユで盛り上がるうぜ。なっ、中ちゃん」

「当然だ」

僕達はタクシーの中で固く誓い合った。

「今日はお疲れ様でした。ごめんね、私のわがままに付き合い合わせちゃって」

僕達のウーロンハイを作り終わると、君は深々と頭を下げた。

「べつにいいよ、気にするなって。なっ、中ちゃん」

「ああ」

「本当はすぐに席替えするつもりだったんだけど、みんな話に夢中で盛り上がったみたいだったから、なかなかチャンスがなかったの」

「分かってるって、俺も言い出せなかったから」

「ありがとう、真ちゃん」

「あっ、そうだ。シユジシユジ、友花となち、紹介するね。シユジシユジにとっては、まだ初対面と同じだもんね」

「えっと、私の親友の友花となちです」

「そのまんまじゃん」

保坂がツツコミを入れた。

「いいのー」

君は頬を膨らますと、そのまま微笑んだ。

「小林友花です、よろしくね」

「河原なつみです、よろしくー。なちって呼んでね」

「覚えた？ 中ちゃん」

「当たり前だろ」

「じゃあ、自己紹介も終わったことだし、とりあえず乾杯といこうぜ」

「そうだね」

「中ちゃん、音頭とって」

「お、俺が？」

「うん」

「でもなんて言っているか」

「適当でいいんだよ」

「適当って言われてもなあ」

『早くう』

「じゃ、じゃあ、お疲れ様」

『お疲れ様でしたー』

キン。キン。キン。キン。

ルージユでの二次会は、ママの計らいでネオンが落ちた後も夜明けまで続いた。

僕は合コンで溜めに溜め込んだ？ エネルギーを、この時とばかりに放出し続けた。とはいっても、あくまで紳士的に、羽目を外さぬように。

朝日が目に眩しく、みんな目を細めた頃、友花ちゃんとなつちゃんは一台目のタクシーで、ベロンベロンの帰路に発った。二人を見送った僕達も、続いてやってきた二台目に乗り込んだ。

後席に三人が、優和を真ん中にして並ぶ。若さに酔いが手伝って、僕達は車内でも終始騒ぎまくっていた。ただし、あくまで紳士的に、羽目を外さぬように。 念のため。

最初に降りたのは保坂だった。全員分のタクシー代を手渡すと、「じゃっ、後よろしくな」と言って僕達を見送った。

当然のことだが、タクシーの運転手はいるものの、後席は僕と君の二人つきりになり、僕にとって最高の朝となった。しかしこのことは逆に、僕に緊張をもたらす結果となり、車内は静まり返ってしまった。

「ねえ、シュジシュジ、今度はさあ、ルージユでじゃなくて、どこか別の所で二人だけであそぼ？ だめ？」

沈黙を破ったのは君だった。僕はこの突然の信じられない言葉に困惑したが、僕に断る理由などなかった。

「い、いいよ」

「ほんと？ やったー」

タクシーのサスペンションが弾んだ。

「じゃあ、じゃあ、どうしようか連絡。何時頃だったら家にいる？」

「その日によつて違うからなあ…。そうだ、営業所にかけてもいいよ。七時過ぎならいると思うから」

「でも、もしいなかったら？ 昨日の合コンで私のこと知ってる人もいるよ。私、他の人と話すの嫌だな…」

「そうか…。あっ、じゃあ、偽名を使おう」

「偽名？ どんな？」

「そうだなあ」

「ねえねえ、今井つてのはどお？」

「今井かあ…。うん、いいかも」

「ほんと？ じゃあ、シュジシュジへの電話は今井でかけるね。忘

れちゃだめだよ。真ちゃんにはこの名前は使わないから」
「うん。大丈夫、絶対忘れないから」

最高の朝は、二人だけの最高の秘密の、最高の証人となった。

「クリスマス・イブに、いつものドーナツ屋さんで、七時に。…か」
「いつものドーナツ屋さんで…、駅前のDONDON…だよな」
“DONDONドーナツ”。僕と優和との待ち合わせの場所。

始まりは、あの合コンの二日後に約束どおり営業所にかかってきた、優和の、「シュジシュジ、今度の日曜、空いてる？ 空いてたら、あそぼ？」の電話だった。当然の如く、僕に断る理由はなく、取り留めのない長話の後、待ち合わせ場所に決まったのがDONDONドーナツだった。

DONDONドーナツは駅前のロータリー沿いにある百貨店の入り口にあり、若い女性客でいつも賑わっていた。店の前にはロータリー内にもかかわらず、白線で仕切られた駐車スペースが三台用意されていて、百貨店専用の駐車場よりもその使い勝手のよさから駅前で待ち合わせをする人の殆どが、この三台分の駐車スペースに車を止めようとした。ただ、ここはいつも満車だったから、みんな駐車違反と知りつつも、ロータリー内に駐車できそうなスペースを見付けては、ロータリーに張り付くように車を止めていた。だから

ロータリーの中は常にバスが一台やつと通れる程度の道幅しか残っていないといった状態だった。

「俺もよく張り付いてたっけ」

僕はソファアーに寄り掛かると天井を仰ぎ見た。

店内に入ると、優和はいつも手のひらを力一杯広げ、笑顔の横で振っていた。それはドーナツを片手にだったり、コーヒーカーップを片手にだったり、とにかく優和の左手は必ずと言っていいほど、なにかを持っていた。時々、気付かない振りをしてキョロキョロしている、優和は背伸びをするように手のひらを高く挙げて、ゆっくり大きく振り出す。それでも気付かない振りをしていると、「シユジ」と、不安そうな顔で呼び始めるんだ。

僕は自然と笑顔になり、行き交う女性客を巧みにかわして席に着くと、優和はいつも口の周りを真っ白にしている、

「おなか空いちちゃったの。ちょっと待っててね」

そう言うつとニコツと笑って、口の周りの真っ白を気にもせず食べ続けた。

「ゆっくりでいいよ」

僕はそんなピエロのような口元に微笑み返す。

たまにもう一つ皿の上に残っていると、

「シユジ、食べる？」

と、ドーナツを差し出すから、

「食べていいよ」

と答えると、再びニコツと笑って、ドーナツをパクツと頬張る。

そんな光景を、おそらく僕もまた、微笑みながら眺めていたに違いない。

食べ終わると優和は決まって、

「どこ行く？」

と言いながら僕の顔を覗き込んだ。

「何処に行きたい？」

僕が訊き返すと、

「じゃあねえ…」

と少し考えて、いつも一つだけリクエストを出すんだ。

僕はそのリクエストに応じて車を走らせた。

あの頃は…。

「楽しかったな…」

僕のはがきの文字を指でなぞると、再び天井を仰いだ。

優和、優和はいつも、「どこ行く？」って訊いていたけど、実は自分の中では行きたい所を既に決めていたんだよね。勿論、僕も時々はリクエストを出したけどさ。例えば、いちご狩りとか。

そういえば、この時の優和は、「元、取らなきゃ」って、質より量とばかりに懸命にいちごを食べてたね。そんな優和を見て笑う僕に、「シユジ、ちゃんと食べて」と、真顔で怒ってた。優和はいつも一生懸命だったから。

あ、それとさあ、入り口付近にいたカップル、覚えてる？ 僕はその二人が羨ましかったんだあ。いい雰囲気だったから。僕もあんな風になれたらって思ってた。本当はね。だから帰りにいつも優和を降ろした後で、優和がカラオケで定番としていたお気に入りの歌の歌詞を真似て、少し走った所でブレーキランプを五回点滅させてたんだ。優和には、「歌の歌詞を真似てるだけで、特に深い意味はないよ」と誤魔化してたけど、本当は僕の精一杯の意思表示だったんだ。そんなことやっても無駄なことは分かってただけだね。

僕はいつの間にか、はがきの中の優和に話しかけていた。

僕達が毎週のようにDONDONドーナツで会い、遊ぶようになるまでに、たいして時間はかからなかったね。でも、このことは二人だけの秘密だったから、優和と出会って間もない頃に、「優和は中ちゃんの手にも負える女じゃないよ」と、まるで忠告のように言っていた保坂が知ったら確実に驚くだろうな。

いつしか僕は「優和ちゃん」から「優和」に変わっていて、優和も僕を「シユジ」と呼ぶようになっていたね。

「ほんと？ キュウちゃん。それって、いつでもいいの？」

「いいよ。前もって連絡してくれれば。フリーパスを手配しておくよ」

「やったね、真ちゃん。シユジ」

『おっ』

いつもの顔が、いつもの場所に群がっていた。

「じゃあ、早速いつがいい？」

「えっ、今決めるのか？」

保坂が驚く。

「そうよ。こつこつなのは早い方がいいの」

「そんなもんかねえ。うーん、じゃあ、来月初めの日曜はどう？」

「うん、私はいいよ。シユジは？」

「俺はいつでもいいよ」

「うん。市川君はOKだよな」

「優和さん、ちよっ」

「ねっ」

「は、はあ……」

保坂の提案した日にちは、君より二つ年上の市川には何故か決定日として、その日の強制参加の通達となった。

僕達の初めての遊園地は、最終的には友花ちゃんとなっちゃんも誘って六人となった。

女性と一緒に遊園地が初めてだった僕は、少しだけ大人になったよ
うな、なんとも言えない初めての気分により一日中酔いしれていた。

アトラクションに乗るたびに、ジャンケンで誰と乗るのかを決める。君を意識すればするほど、脈は落ち着きをなくし、ジャンケンの手に力が入る。アトラクションによつては、それが過剰になった。結局、君とペアになったのは数えるほどしかなかったが、めでたくペアになったアトラクションでは、僕の顔に君の髪が掛かったり、僕の肩と君の肩が、腕と腕が、さらには僕の胸に君の背中が密着したりして、僕は至福の時を漂った。その都度僕を包み込む君の香りと相まって、冬服越しの感触も、僕にはまるで夏の素肌のようにだった。

「いつの間にか、真つ暗だね」

辺りにイルミネーションが瞬くと、君は僕等男三人の血と汗の結晶？　とも、努力の成果？　とも言えるアーケードゲームの景品のぬいぐるみを両手一杯に抱えながら空を見上げた。

ゲームで一位になるともらえるぬいぐるみを、僕は意外と簡単に手にしていた。君のためとはいえ、人と競うことを好まない僕にこんな特技？　があつたなんて、自分でも驚きだった。

「なあ、みんなは最後はなにで締めたい？」

歩みを早め、僕達の前に出て振り返ると、そのまま後ろ向きで歩
きながら保坂は何故か人差し指を立てた。

僕達は立ち止り、ジェットコースターとかフライングカーペット
などの絶叫マシンを保坂を指差しては各々リクエストした。ところ

がそれらは全て却下され、「最後はやっぱりコーヒーカップでしょ」と再び人差し指を立てた保坂の一存で、結局コーヒーカップに決められてしまった。

「えー。コーヒーカップ？」

みんな一様にふくれっ面で不満を呈した。

「ハア、コーヒーカップかあ……」

「嫌だなあ……」

「ねえ、これって決定なのお？」

君から始まって、なっちゃん、友花ちゃんとコーヒーカップへの憂鬱は漏れていった。

僕と市川の不満は、これで最後なのに、これでは絶叫ができずスツキリしないという単純なものだったのだが、どうも君達にとっては、また別の意味で不満だったようだ。

そんな君達の憂鬱を聞いているうちに、僕と市川は、コーヒーカップは決して侮ってはならないことを思い出した。そして、何故君達が憂鬱がるのかも。

「……いいかも」

「……いいすよね」

僕と市川の悪戯心が顔を出した。

そうか、保坂は最初からこれが狙いだったのか。

かくして男子一同全員一致でコーヒーカップに決定した。

君と友花ちゃんとなっちゃんの三人は仕方なく両手一杯のぬいぐるみを買ってきた紙袋に詰め込むと、君は僕と保坂をお供に、友花ちゃんとなっちゃんは市川を従えて、それぞれのカップへと乗り込んだ。

「……いい、おもいつきり回しちゃだめだからね。分かってる？ シュジ、真ちゃん」

コーヒーカップが羊の皮を被った狼だということを君はちゃんと知っていたのだろう。真剣な顔で睨む君の顔には、不安で一杯の表情が見え隠れしていた。

『分かつてる分かつてる』

僕と保坂はそんな君の不安をよそに、この最後になるアトラクションを楽しむべく、軽快に頷いた。

コーヒーカップがゆっくりと動き出すと、以心伝心と言うべきなのか、それともこの手の悪戯がこのアトラクションでの定番の悪戯になっていたからなのか、僕と保坂は特に顔を見合せたわけでも、目配せをしたわけでもないのに、動き出した途端、勢いよくカップを回転させた。

「ちょ、ちよつとお、シュジ？ 真ちゃん？」

『イエーイ』

「だめー、止めてー」

『ひゃっほー』

「キヤー」

『ふうううー』

「お願い、止めてー」

『うおー、ほっほっほおー』

「……………」

僕も保坂も君の叫び声を無視して、高速で流れる景色の中を遠心力で背中がカップに張り付くのに耐えながら、なおも回し続けると、君はとうとう回転の勢いと遠心力に負けて、ズルズルと横になり、無言のままカップに張り付いた。

『ふうううー、 # \$ % & @ 』

それを見た僕達はますます調子に乗って、さらに勢いよく回し続けた。おそらく僕達のカップは周りのどのカップよりも速かったに違いない。しかし間もなくしてカップが止まると、君だけではなく、僕も保坂もカップから降りられないほどにぐったりとなってしまうていた。

狼は僕と保坂にも牙をむいたのだ。

僕は、これは勢いよく回転させるものではないと、改めて実感し、そして後悔した。

駆け付けた係員に僕は散々注意された後、肩を抱えられてどうにかこうにか降ろしてもらつたという醜態をさらし、やっこの思いで市川達が待つベンチに辿り着くと、三人は白い目で僕達を見上げながら温かそうにコーヒを啜った。

フラフラの僕達三人は最悪の気分で市川達の横のベンチに座ると、そのままグダーっと凭れ掛かった。

「うー、気持ちワル。…やりすぎた」

保坂は天を仰いで、胃の辺りを摩った。

「もー、最悪。だから言つたじゃない、おもいつきり回さないでっ
て」

君は意外にもスクツと立ち上がり、並んでグダーつとしている僕と保坂を睨み付けた。

「ごめん。でも、なんでそんなに元気なんだ？」

眉間にシワを寄せながら保坂が驚く。

「えっ、ああ、私回復早いんだあ。って、ちょっとシュジ、大丈夫？ 真つ青だよ」

僕の場合は保坂よりもさらに深刻で、ベンチでグダーつとしている間にも、見る見るうちに顔色が青ざめていって、言葉を返すことすらできないほどに参っていた。

「いいなあ、保坂さん達は。俺なんか暇で暇で、不完全燃焼ですよ」
横のベンチで僕達のそんなやり取りを見ていた市川が、コーヒをズズツと啜り、「ハア」っと羨ましそうに溜め息をついた。

市川は友花ちゃん達に見張られていて、カップを回すことができなかつたのだ。

ゴン。

「痛ッ」

友花ちゃんとなつちゃんのダブルげんこつが市川に炸裂した。

『市川君もああんりたいの？』

「い、いいえ…」

ちなみに、市川は友花ちゃんとなつちゃんとも、二つ年上である。

「みんなで写真撮るから、ここに集まれ」

手を振りながら保坂がその場所を指差す。

クリスマスが近いせいか、園内の木々はまるでクリスマス・ツリーのようだった。

保坂曰く、“最高のアングル”、で各々ポーズを決める。その中で君はまだ思案中。

どうにかこうにか回復した僕は、その隣で自分なりのポーズを決めた。

「じゃあ、撮るぞ。動くなよ」

と、突然、僕の右手は繋がれた。ドキッとして君を見ると、君は素知らぬ顔でポーズを決めていた。

「はい、バター」

保坂のお気に入りの掛け声で、シャッターのリモコンボタンは押された。

手を繋ぐということが、こんなにもドキドキするものだとは知らなかった。

「今度はさあ、スキーをお願いしちゃうよ」

年が明けて、二月最初の土曜日。僕達は有給を取って、六人で苗場にいた。遊園地の帰りに寄ったカラオケ店での君のこの一言が現実になって。ただ、何故有給を取ってまで土曜日にしたのか、その理由は僕には知らされていなかった。

ヤッター。やっと優和と乗れる。

ジャンケンでやっと叶ったペアリフト。それまでは何故か友花ちゃんやなっちゃんとはかりで、なかなかペアになれなかっただけに僕の喜びはひとしおだった。どんなにこの時が来るのを待ち望んだか知れなかった。

二人並んでリフトを待つ。そのリフト待ちの列がゆっくりとリフト乗り場に吸い込まれていく。混雑に不意の密着。僕はその混雑から君をかばうようにして進んだ。

「はあー、すごい混んでたね」

「…うん」

これがリフトに乗ってすぐに、僕達が交わした最初の会話だった。しかしその会話は、リフトに乗るまでとはまるで別人のようなテンションの低い僕の相槌により、それ以上続かなかった。

「ねえねえ」

「…うん」

「あつ、そういえば」

「…うん」

君はその後もなにかと話しかけてくれていた。

「なんだって、シユジ、どう思う?」

「…うん」

なのに僕はずっと自分のスキーに視線を落としていて、自分から話しかけることもなく、結局僕の「…うん」で会話を終了させた。た。

ゲレンデを滑るスキーヤーが小さく見える。

初めて君と一緒に滑った一本目で僕が驚いたこと、それは君が僕よりスキーが上手かったということ。だから二本目からは市川と一緒に君の後を必死でついていくばかりになった。

保坂は保坂で僕達を待たせては、なっちゃんに付きっ切りでボー

ゲンを教えながら、まるで恋人同士のように下りてくる。

僕だつて、もしも君がなつちゃんのように初心者だったなら教えられたのに、なのに君は僕より綺麗なフォームで滑っていった。

こんなこと気にするほどのことではないのかもしいが、僕にはコンプレックスとなつて胸の中でずつとモヤモヤしていた。

そんな僕のモヤモヤが、いざ一緒にリフトに乗ってみると表面化して、この二人だけの空間に漂い、そして君にも伝わっていたのかもしれない。

「うー、やっぱり寒いよね、リフトって」

「…うん」

健気にも、それでもなんとなく会話を続けようとする君の声からは一向に明るさが消えることはなかった。

君が僕に気を遣っているのはあきらかだった。しかしこうなつてしまつと、僕は情けないことに、たとえ些細なことでも、なにかきつかけがない限り、自分が悪いと分かつていても、自分では収拾を付けられなくなり、最悪の場合はそれが長時間続いてしまう。

僕のどうしようもないこの性分は、大切な女性むすめといる時でさえ顔を出していた。

「どうしたの？ シュジ」

君がとうとう心配顔で覗き込んだ。

「ん？ ーん、なんでもないよ」

僕はそんな自分と自分のモヤモヤを悟られまいと、あえてキョトンとして見せた。

「ん？」

それを見た君の顔もキョトンとなる。

「……………」

プツ。

僕達はお互いのキョトン顔に二人して笑つた。

べつに不甲斐無くて格好付かなくてもいいじゃないか。所詮、自分は自分。こうしてこんな自分にも笑顔を見せてくれて、しかも一

緒にいられるんだから。

急速にこの空間が、本来あるべきはずの居心地のよい時間へと戻っていく。

なんとも人騒がせというか、傍迷惑というか、僕の中の厄介者は簡単に出現する半面、きつかけさえあれば溶けてなくなるのも早い、実に身勝手な存在だった。

「うー、それにしても寒いよな、リフトは」

「それ、今私が言ったばかり」

「えっ？ そうだっけ？」

僕達はお互いの顔を見合わせると、再び二人して笑った。

「やっと一緒のリフトに乗れたね」

「うん」

「あ、そうだ、アメなめる？」

「うん」

「ちょっと待っててね」

君はグローブを外し、ウエストポーチから昔懐かしのドロップ缶を取り出すと、その缶を振りながら歌いだした。

ガシャ、ガシャガシャガシャ。

「なにが出るかな、なにが出るかな、それはドロップまかせよ」

ガシャ、ガシャ。

「手、出して」

ガシャ。

「あつ、メロン味」

君は僕の手のひらの緑色のアメを摘まむと、ニコニコしながらその指を僕の口元に近付けた。

「はい、あーん」

君の口が「あーん」の形になる。

えっ、本気マジで？

君の予期せぬ行動に一瞬戸惑ったが、このシチュエーションはやはり嬉しかった。

「あーん」

君はなおも「あーん」の口で僕を見ていた。

僕は前後のリフトと足元に広がるゲレンデをキョロキョロと確認すると、すかさず「あーん」をした。

…意外に「あーん」は緊張する。

「わっ、シユジのほっぺ、冷たい」

さっきまで口の中でドロップを転がしていた君の手が、僕の頬にそっと添えられた。

冷え切った僕の頬が、温もりという安らぎで潤う。

ん？ 今は左のほっぺにあるようだ。

「ね、私は？」

君が膨らんだ左の頬を向ける。

「すっごく冷たい」

僕もグローブを外し、君の頬に添えた。

「って、アメあるの分かるぞ。ホラ」

僕はドロップのある位置をなぞった。

「へへへ」

もう片方のグローブも外した僕は、今度は両の手を君の頬に添えた。

「こんなに冷たくなっちゃって、あれ着ければ？」

「だってあれ、格好悪いんだもん。でも、どうしても我慢できなくなったら着けるね」

「霜焼けになっちゃうぞ」

「大丈夫。そしたらこうやって温めてもらうから」

君の頬に添えた僕の手、君の手が重なった。

「シユジの手、あったかい」

微笑む君の手も、温かかった。

「えっ、泊まるの?」

「じゃあ、優和と一泊?」

「そうだよ。でも俺と友花ちゃんは明日用事があるから、これでバイナンだけだね。優和がな、内緒に言うからさ、黙ってたんだけど。まっ、楽しんでよ」

保坂は僕の腕をポンと叩くと行ってしまった。

「楽しんでよ、って…」

「どお? 驚いた?」

悪戯顔で君が覗く。

「そ、そりゃあ…」

優和と一泊。僕に下心が芽生えなかったと言えば嘘になる。事実、僕の頭の中で色々な妄想が駆け巡り、理性と格闘していたのだから。

「市川君?」

なっちゃんの声に目を向けると、そこには目を丸くして突っ立っている市川を心配そうに覗き込むなっちゃんがいた。

市川、お前もか…。

知らされていなかったのは、どうやら僕だけではなかったらしい。おそらく市川の中でも、格闘が繰り返されていることだろう。

『イツキ、イツキ、イツキ、イツキ』

これでもう何回目になるだろう。市川はベロンベロンの状態でチヤンポンを飲み干した。

市川だけでなく、僕達も最低五回は飲んだこのチヤンポンは、ビール、日本酒、焼酎、ワインの他に、何処から持ってきたのか、醬

油やソース、それにケチャップまでもが混ぜられたものだった。さらにその液面には、つまみにと買ったポテチやさきいか、カールのチーズ味がトッピングとして小さくされて浮いていた。

トランプに負けると、罰ゲームとしてこれを一気に飲みする。初めは一つの酒に一つの調味料だったが、みんな酔いが回るほどに悪乗りして、どんどん過激になり、最終的に完成されたのがこのチャンポンだった。

みんな一様に、ホテルに用意されていた浴衣を着ていたのだが、酔うほどに乱れて、僕と市川は上半身裸で、浴衣の裾をたくしあげてトランクスを丸出しにしている、君となっちゃんもスウェットに浴衣の帯だけが巻き付いただけの姿となっていた。

よくもまあ、間違い？ が起きなかつたものだ。

トランプは日付が変わっても続けられていたが、一番多く負けていた市川が酔い潰れてベッドにのびたのを合図に、さすがにおひらきとなった。しかしなっちゃんの悪乗りはそれでもまだ続いて、のびている市川に綺麗な？ メイクを施した。

「うわあああー」

翌朝、僕は市川の悲鳴で目を覚ました。

「…でも」

「なんで今になって…」

「クリスマス・イブに伝えたいこと…、って」

はがきにある住所は僕の知るものとは違っていた。しかも住所には番地がなく、電話番号も書かれていなかった。僕が知る優和のアドレスは、僕が二十六になる年、すなわち五年前の福岡で止まっていた。

僕は、優和が四月に福岡に行つてからというもの、優和からの電話をただ待つだけで、自分から電話をかけることはなかった。というのも、好きな人がいる優和にとって、所詮遊び友達の一人ではない僕が、のこのこ電話をするなんておこがましいと思つたからだ。もともと片思いの恋だけど、のこのこ電話をして未練がましいと嫌われなくなつたのだ。

でも、一向にかかつてこない電話に、やがて僕はこの片思いに終止符を打った。そして、いい思い出ししようと努力した。

ところがその年の十二月に優和から電話をもらつて、クリスマス・イブに会えることになる、そこには喜んでいる自分がいて、どんなに自分を誤魔化しても、どんなに思い出ししようとしても、やっぱり僕の中ではまだ続いているんだと知つた。

しかし再会后、優和からの電話はかかつてくることはなく、年明けに思い切つて電話をすると、「この電話番号は現在使われておりません」というアナウンスが流れた。友花ちゃんに訊いても、「そのうちかかつてくるよ」と教えてはくれず、結局今日まで連絡が取れないまま、本当に僕の片思いはいい思い出となつてしまつていた。

その声は、テレビのCMにクリスマス・ソングをよく耳にするようになり、白を基調に、赤、青、黄色、緑にオレンジといったイルミネーション達が、街にそれまでとは違う期間限定の夜景を彩りだした十二月の初めに、元気に受話器から飛び出した。

「シユジ、元気？」

懐かしい。

「ごめんね、電話しなくって」

いいんだよ。

「ねえ、クリスマスにみんなが集まらない？ あそぼ？」
遊ぼ遊ぼ。

「ねえ、聞いてる？」

「聞いてるよ」

そう、僕はこの声に会いたかったんだ。

「そお？ よかったー。怒ってるんじゃないかって、ちょっぴり思ってたから」

「怒ってなんかないよ。そうかクリスマスかー。いいねえ、遊ぼ遊ぼ。で、二十四？ 二十五？」

「うーん、二十四がいいな、イブだから。ロマンティックでしょ、イブの方が」

そうだね。

「本番は二十五だよ」

「前祝いよ、前祝い」

そうそう、前祝い。

「分かった。じゃあ、二十四ね。保坂と市川にはもう訊いた？」

「んーん、まだ」

「じゃあ、明日訊いてみるよ」

「うん、お願い。あつ、そうそう、友花となちはOKだって」

「へー、友花ちゃんとなつちゃんにはもう話がついてんだ」

「そうよ。驚いた？」

「ちよつとだけね。じゃあ、俺の方は分かったら電話するよ」

「あ…、いいよ、優和がまた電話するから」

えっ、なんで？

「あああ、うん、じゃあ、頼む」

「なんで？」とは訊けなかった。理由を訊いてはいけないような気がしたから。

いつものようにテレビから流れてくる音をBGMに、郵便物に目を通していた時のことだった。

この電話からクリスマス・イブまでは、意外とあつという間だった。本来ならば君に会える喜びで、僕はその日が来るのを待ち遠しく思うはずなのに、年末に向けての仕事の忙しさがそんな僕の間を短くしてくれたようだった。

街はクリスマス・イブで、人も車も活気付いていた。いつもよりも多い車の数に、僕は危うくロータリーに張り付くことすらできなくなるどころだった。

DONDONの店先には大きなツリーが飾られており、昼間からピカピカとまばゆい光を放ち、ウィンドウにも雪が降り、サンタやトナカイ、ツリーに鈴などの絵が描かれていた。入り口は赤、白、緑を金と銀で豪華にディスプレイされ、店内はいつも以上に混んで

いて、カウンターではサンタが忙しく接客している。

この場所には待ち合わせの十分前に着いたはずなのに、君はもう席に座ってドーナツを食べていて、口をモグモグさせながら僕に気付くと、胸元でそつと手を振って微笑んだ。指先と口の周りを白くして。

僕は自然と笑顔になり、行き交う女性客を巧みにかわして席に着いた。

「おなか空いちゃったの。ちょっと待っててね」

「ゆっくりでいいよ」

いつもなら女性客ばかりの店内に恥ずかしくなるのに、今はこの定番となったやり取りに、懐かしさと、喜びと、そして新鮮さを感じ、気にはならなかった。

「シユジ、食べる？」

君はニコツとしながらドーナツを白の指で差し出した。

「食べていいよ」

僕は君に会えたあまりの嬉しさに、今にもギョツと抱きしめたくなるのを必死で抑えると、ただ黙って目の前のモグモグを眺めた。

「なあに？」

そんな僕に気付いた君は、はにかんだ笑みを向けた。

目と目が合った。

「いや、べつに」

いつの間にか君に見とれていたことを誤魔化すために、僕は慌てて君の視線から目を逸らした。

「あつ、もしかして好きになっちゃった？」

「えっ、そんなことないよ」

突然の予期せぬ言葉にドキツとして思わず口にした自分の本心とは異なった言葉は、君の笑みに一瞬の翳りを宿らせた。

僕は気まずさを感じ、タバコに逃げた。

君は何事もなかったかのようにドーナツを食べ続けていたが、それきり僕達には交わす言葉はなく、僕は二本目のタバコに火を点け

ずにはいられなかった。

ガラスの向こうには、冬の通りを行き交う人々が寒そうに歩いていた。

「どこ行く？」

ドーナツを食べ終えて、微笑みながら僕を見る君の顔は、さっきまで僕達の間を流れていた気まずい空気を感じさせないもので、眩しすぎるほど優しくかった。

情けないことに、僕はその微笑みに少しほっとして、救われた気がした。

「何処でもいいよ」

「じゃあさ、海に行こ？」

「海でいいの？ 海ならいつでも行けるじゃん」

「今日の海が見たいの。だめ？」

君が覗き込む。

無邪気というか、あどけないというか、とにかくそんな君の顔に、僕は思わず唇の端が緩んだ。

「いいよ」

僕達の海といえば、半島の付け根付近にある、私立大学のグラウンドのそばの砂浜だった。グラウンド脇の一方通行の道に沿って延びる松林の向こうにある遊歩道の下に、その砂浜は広がっていた。そこは遠浅ではなかったため、海水浴場にはなっておらず、そのためか普段から人気の少ない場所だった。しかしそのことが逆に、僕達にとっては海を見るベストポイントにしていた。

松林は五、六メートル程の奥行きがあって、防風、防砂の役割を

果たしており、私立大学のグラウンドを離れると、天女伝説で有名な松の辺りまで続き、そこで一旦途切れるが、そこから再び半島の先端付近にある灯台まで続く。遊歩道もまた、この松林に沿って灯台を終着地としている。

車を路肩に止めると、僕達は松林を横切り、遊歩道に設けられている階段を下りた。

「うっわー、すっごーい。ドドドドドーンだつて。怒ってるよー」
灰色の砂浜には僕達の他に人はなく、君は目の前の唸りを上げる波達を見て、振り返って笑うと、裸足になって波打ち際まで走っていき、ドドドドドーンと轟音を立てて碎ける波と追いかけてこを始めた。

僕はその光景を眺めながらタバコを吹かした。

風はさほど強くなく、空も穏やかな青に染まり、午後の日差しが優しく僕達を包み込んでいた。

「あー、楽しかった」

君はひとしきり波との追いかけてこを楽しむと、「ハアハア」言いながら笑顔で戻ってきた。二、三メートル程手前からは足元もおぼつかないような足取りだったが、それは御愛嬌、ふざけてのこと。両手を膝に置き、なおも「ハアハア」とやっている君の笑みは終始僕に向けられていたが、突然、「はあ」と大きな声と共に深く息を吐いたかと思うと、「うーん」と伸びをして、「はあ」で振り返って海を眺めだした。

「ねえねえ、見て見て、船だよ船。遠いーねー。どこから来たのかなー」

遠くに見える貨物船を見つけた君は、楽しそうに指差した。

「おーい」

そして聞こえるはずのない貨物船に何度も両手を振った。

それでもやはり真冬の砂浜は寒く、濡れた素足に纏った砂が、やがて水分を蒸発させてパラパラと落ちる頃、僕の前には身を屈めて「ハアーツ、ハアーツ」と、両の手に息を吹きかけている君の背中があった。

「座ろうか」

「…うん」

君はその場に座ると、素足に残った砂を払い始めた。

僕は君の小さな背中を抱き包むようにして座り、冷たくなった手を握って、コートのパocketsに誘った。

「…あつたかあい」

囁くような君の声。

「うん」

僕は君の肩越しでそつと頷いた。

重なり合う二人の、パocketsの中で握り合った手と手は、僕達の周りに時間の違う空間を作り出しているようだった。

冷たかった手は次第に温もりを取り戻し、その温もりは僕の手を包み込んだ。

「あつたかいいね、このパockets」

「あつたかいつて、このパocketsのことか？」

「そうよ。どこのブランド？」

「えつと、ミスター・シユウジ。かな？」

僕は君のペースに合わせてみる。

「ふーん、そつか」

つれない返事が返ってきた。

「そつか、つて…。あのな」

「うそつそ。うそだよ、ごめんね」

君は僕に視線を移すとクスツと笑った。

ち、近…。

僕は振り向いた君の横顔の近さに呼吸を止められた。

こんなに近づいたことはなかった。ほんの少し。あと数センチ。いや、数ミリ。冬の寒さに身震いするだけでくっついてしまいそうな距離に、君の顔がある。自分が誘ったシチュエーションながら、いざ君の横顔をこんな間近で向けられると、とてつもなく戸惑う。

「あー、ドキドキしてる」

海を見ながらの君は悪戯声だった。

「そ、そんなことないよ」

「そお？」

「そお」

「ふうん」

「全部お見通しよ」とばかりに君が何度も首を縦に振る。

「な、なに」

「んーん、なんでもない」

他愛のないやり取りだった。しかし不思議なもので、こんなやり取りが、一瞬にしてレッドゾーンに達し、そのままオーバーヒートを起こしてしまうんじゃないかと思われた僕の鼓動を冷却してくれた。

冬の海風に吹かれながら、やがて僕達は言葉をなくしていき、無言のまま海を見詰めるばかりになった。

君がなにを思っで見詰めていたのか僕には分からない。でも、僕にとつてこの時間は、穏やかでとても優しい時間だった。君の香りと背中の中の温もりに包まれて、まるで小春日和の中を漂っているかのようだった。

「…ずっと、こうしていたいな」

君は波の音にかき消されてしまいそうな声で呟いた。

「あ、そうだ。写真撮ろうか」

ポケットの中の君の手に、一瞬、力を感じた。

「…うん」

小さな声だった。
遠くに見えていた貨物船は、もう見えなくなっていた。

午後の日差しが空の青をオレンジに変える頃、僕達は半島を離れ、海岸の近くに聳える平へ夜景を見に車を走らせていた。この山の山頂展望台からの夜景は素晴らしく、地元の恋人達の定番スポットになっでいて、多分に漏れず僕達も定番スポットとしていた。天気がいいと富士山がよく見え、富士山を見た後、夜景を楽しむという一連の流れが僕達の定番だった。

山頂への道は、有料のパークウェイの他に、道幅の狭い一般道があり、地元民なら決まって一般道を選ぶ。この一般道は入り口が分かりづらく、目印になるのは大手電機メーカーの工場くらいだったが、僕達は誰が言ったか、ヤクザ御殿と呼ばれる石垣の上にモリを刺したような塀を持つ豪邸を目印にしていた。

そういえば、君はこの豪邸を見るたび、「いつ見てもでっかいよね」。って、そう簡単にコロコロ変わんないか、家だもん」とか、「ヤクザ御殿てさあ、本当にヤクザいるのかなあ」とか、「うっわー、ベントツだ。やっぱヤクザ屋なんだ」などと言っては、御殿に手を振っていたっけ。

通称ヤクザ御殿を曲がると、しばらくはなだらかな上り坂で、途中にある運動公園を過ぎた辺りから急カーブの連続となり山頂へと続く。

隣の山には歴史建造物があり、1159段の石段を下ると、僕達も行ったことのある石垣いちこの産地となる。

連休中や行楽シーズンともなると、夜はともかく、昼間は観光バスが止まるほどの、平は観光地だった。

学生の頃は、ゼミの仲間とよくここに走りに来ていた。みんな夕

イヤをキーキー鳴らしてカーブを攻めていたが、僕はもっぱら助手席専門で、ここを攻めたことは一度もない。

たまに路肩に止まっているカップルの車を見付けると、ゆっくり走って野次ったり、脇を通り過ぎる時、エンジンを吹かして爆音を立てては冷やかして喜んでいた。若気の至り？ とはいえ、よく事故らなかつたものだと思う。

保坂と出会つたのはこの頃で、路肩に止めていた保坂の車を野次つて口論となり、その後、何度か山頂で顔を合わすようになって話し始めたのが腐れ縁のきっかけだった。保坂はこの頃から既にモテていたようで、度々助手席の女性が違っていた。保坂曰く、「ここからの夜景は、彼女をベッドに誘うための前戯」、とのことだった。ゼミの仲間の中にも彼女のいる奴はいたし、僕も欲しいと思つたことはある。しかし、この頃の僕は仲間と馬鹿騒ぎしている方が楽しかった。

山頂に着くと、普段はガラガラの駐車場は僕達と同じ目的の車で一杯だったため、仕方なく来た道を戻り、あの路肩へと向かった。実はあの路肩、すぐ脇を車が通り、一台分しか止めるスペースがないのだが、山頂展望台以上に夜景のよく見える、いわゆる穴場だった。しかし、かつて僕がしたように、野次のスポットとして健在であり、なかにはそれが原因で別れたカップルもいるという、曰く付きの場所で、それを知る地元の人達は決して止めない場所。そういう意味でも穴場となっている。

以前、この話をした時、君は臆することなく、「じゃあ、今度行ってみようよ。大丈夫だよ。面白いじゃん」と行く気満々だった。数日後、早速君のリクエストである路肩に止めると、君は「ここに止めたら冷やかされちゃうよ？」とにやけて、逆にそれを楽しんでるようだった。

行き交うヘッドライトやテールランプを見送っていると、案の定、何度か冷やかされたが、君はその都度、「あー、みんな、やきもちやいちゃってるよー」とか、「彼女作れよー」とか言っては窓の外

に手を振っていた。夜景はそっこのけで。

車を止めると、街も港も、まだオレンジの空を残していた。しかし冬の空は足が速いから、すぐにコバルトブルーに染まるだろう。

FMからは去年一緒に聴いたクリスマス・ナンバーが流れ始め、僕達のクリスマス・イブに華を添えた。

「ここに止めたら冷やかされちゃうよ？」

君は相変わらずこの場所ではそっちに興味があるようだ。

「今日は大丈夫だよ。イブだから」

「そうか、みんなロマンティックなんだもんね」

ところが、なかにはそれでもない奴等もいて、結局ピーピーと冷やかされた。

「あー、あの人達、やきもちやいちゃってるよー。イブなのに、彼女いないのかなあ」

窓の外のテールランプがゆっくりと消えていく。

「きつと車が恋人なんだよ」

「大学生の時のシユジみたいに？」

「俺はみんなで馬鹿騒ぎするのが好きだっただけ」

「そうだったー、そうだったー」

声に合わせて、パチ、パチと手を叩くと、君はしみじみと僕を見た。

「そっかあ。でも、それもなんだか淋しいね」

「それもって？」

「車が恋人ってことよ」

君は悪戯顔で微笑んだ。

沈み始めた太陽は昼間の勢いを急速になくし、コバルトブルーの空にオレンジを奪われた。オリオンの下、もう一つの空に星達が瞬

いた。

「綺麗だね。もう、見られないと思ってた…」

保坂が描いた地図には、集合場所のカラオケ店は記載されていたが、駐車場までは記入されていなかったため、僕達は駐車場を探すのに手間取って、どうにか空きのある駐車場に辿り着いた時には、既に集合時間に遅れてしまっていた。

保坂の知り合いが経営するカラオケ店は、雑居ビルの建ち並ぶ繁華街にあり、その周辺に幾つか駐車場はあるにはあったが、時間帯のせいか、運悪く何処も満車だったのだ。

「急ご」

君が手を引く。

地図を片手に路地から路地へと小走りで抜けていき、メインストリートに出ると、保坂の地図どおり、五十メートル程先にその店は見付かった。

カラオケ店の前では友花ちゃんが待っていて、僕達を見付けると、

「早く来い」とばかりに大きく手を振った。

「友花ー」

君は手を振り返して走っていき、なにやら話し始めた。

ふう、とりあえず二十五分遅れか…。

僕はほっとして歩みを緩めたが、よく見ると、何故か君と友花ちゃんの横顔には笑みはなく、それどころか深刻な表情にさえ見える。いったいどうしたんだ？ なにかあったのか？ もしかしたら友花ちゃんは遅刻したことを怒っていて、優和はそのことで叱られているのでは？

僕は、ハラハラ、ドキドキしながら、二人のもとへと急いだ。

「ゲッ、参ったな、こっち見たぞ」

僕には視線の先にいる友花ちゃんが、仁王様のように見えて仕方なかった。

恐る恐る到着すると、案の定、友花ちゃんは間髪を入れず、キツ、と僕を睨んだ。

「シユジシユジ、遅い！」

「う、ごめん」

僕は反射的に謝った。

『おそーい』

部屋に入ると、僕達は笑顔の大ブーイングを浴びた。

さっきは怒った友花ちゃんも、今はもう怒ってはいないようだった。君も怒られたにしては、友花ちゃんと同様に明るい顔をしている。どうやら僕だけがダメージを引きずったままのようだ。

既に部屋は飾り付けられていて、テーブルにもケーキやチキンが用意されていた。

「じゃあ、早速始めるか」

待ち兼ねた様子の保坂が、パーティー開始の宣言？ をした。

明かりの消えた部屋の中で、ローソクの炎がみんなの顔を照らし出し、流れてきたクリスマス・ソングに合唱すると、「メリー・クリスマス」の掛け声と共にクラッカーが弾けた。

久し振りに食べる生クリームの味は最高だった。甘い物好きの僕にとって、ケーキは大好物なのだが、男の僕がケーキ屋に一人入るというのは、やはり抵抗があり、なかなか食べるチャンスがなかったからだ。

「誰から歌う？」

「俺から歌う」

友花ちゃんの声に先頭を切ったのは保坂だった。僕と同様に甘い物好きの保坂が、ケーキもそこに歌った歌は、やはり相変わらずだったが、トップバッターとして盛り上げるには十分な人選だっ

たと思う。

保坂の後、歌は、友花ちゃん、市川、なっちゃんと盛り上がる中、僕の番となった。しかし僕が熱唱した演歌は、「クリスマスに演歌はないだろう」と、部屋中を「狙いすぎだよ」のブーイングに染める結果となってしまった。ウケを狙って、あえて“ど演歌”を選曲してみたのだが、見事にハズしたようだ。

僕のダメージは、きつとまだ残っているに違いない。

歌って、話して、大笑いして時は過ぎ、やがてプレゼント交換が始まった。

僕はこの時のために奮発していた。誰に渡るか分からなかったが、君を想定して選んだものだった。

「じゃあ、真ちゃん達、グー、チヨキ、パーに別れて。私達も決めるから」

友花ちゃんの指示に従い、僕はチヨキ、保坂がパー、市川はグーと決まった。女性陣は、友花ちゃんがパー、なっちゃんはグーで君がチヨキだった。

僕は心の中で、「ヨッシャー」と叫んでガッツポーズをすると、思わず顔の筋肉が緩んで、耐え切れずにやけてしまった。

僕はダメージを受けたことすら忘れていた。

「あー、シュジシュジ、なににやけてんの？」

「スケベなことでも考えてたんだろ」

友花ちゃんのツッコミに保坂が追い討ちをかけたおかげで、部屋中、“中山は変態”の空気が流れた。

「ち、違っつてえ」

「ハハハ、ち、違っつてえ」って、どもってるぜ」

「だ、だからそんなんじゃないってえ」

「ほら」

プッ。

僕の必死の弁解と、保坂とのそのやり取りに君が吹きだした。みんなの冗談に必死になるのがおかしかったようだ。

「はい、冗談はこの辺にして、そろそろ始めよ？」

友花ちゃんが本線に戻す。

冗談で流れた空気は君をきっかけにとりあえず落ち着き、僕達男性陣は各々にプレゼントを渡した。

「ちょっと、真ちゃんいいの？ これ高かったでしょう」

「年に一度のクリスマスだけ。そんなのたいしたことないさ」

友花ちゃんはブランド物の腕時計を左腕にはめると、「どお？

似合う？」と、喜びをみんなに見せた。しかし、次に包みを開けたなっちゃんは、「私、穴開けてない」と、市川にクレームを付けた。なっちゃんがプレゼントされたのは、ダイヤ？ のピアスだった。

「市川君、開けてくれる？」

「俺、そういうの苦手だから……」

「ダメー、開けてもらうからね」

なっちゃんは、そう言いながらも満更でもない様子だったが、市川は本気で困っていた。

「わあ、可愛い」

君の声だった。

「ほんとだ。ねえ、着けてもらいなよ」

「うん」

「シユジ、いいい？」

「うん」

僕の前に、髪を掻き上げたうなじが出現した。

初めて見る君のうなじと香りにまたまた鼓動が強くなる。

うなじに触れないようにと努める。しかしうなじを意識すればするほど、緊張で手が震えてなかなか着けることができない。

もしも触れてしまったら……。

指が纏れる。纏れるから意識はうなじに向く。

僕は勝手に自ら作り出した負のスパイラルに陥り、一人で焦っていた。

「なに手間取ってたんだよ。緊張してんのか？」

そんな僕を見て、再び追い打ちをかけるかのように保坂がツッコミを入れ、プレッシャーをかけた。

「難しいんだよ。…着けたことないから」

先のことも考えず、安易に「うん」なんて了解したのはいいが、その結果がこれだった。

僕はなんとか着けることに成功したものの、額には汗が滲んでいた。

「どお？」

「うん、可愛いよ。似合ってる」

友花ちゃんが微笑む。

「いいなー、私もそっちがいいよお」

なつちゃんが羨ましがる。

「でもさあ、いくらクリスマスだからって、十字架はないだろ」

保坂が首を傾げる。

「そんなことないよ、可愛いじゃん」

友花ちゃんがすかさずフォロー。

僕がプレゼントしたのは、小さい十字架が三つ並んだペンダント・

ネックレスだったのだが、僕はその狭間でオロオロ。

「ありがとう、シユジ。本当に嬉しい」

そんな僕を君の笑顔がほっとさせた。

「じゃあ、またジャンケンして」

友花ちゃんによると、今度は僕達が誰からもらうかを決めるという。

結果、友花ちゃんが保坂に、僕はなつちゃんから、そして君は市川に決まった。

「おっ、いいじゃん、このタイプピン」

「気に入ってくれた？ 真ちゃん」

「おう。サンキュ、友花ちゃん」

「あれ？ 俺のも保坂さんのおんなじだ」

「え？ じゃあ、中ちゃんのは？」

「俺のも同じ」

「どお？ 驚いた？ 三人で選んだんだよ。面白みには欠けるけど、みんな同じ方がいいんじゃないかと思つて。仲いいし」

「でもなあ、市川とお揃いつてのもなんだかな」

「そんなことないよ。いいじゃん、市川君と一緒になんてなつちやんだつた。」

「そーですよ。俺は嬉しいですよ」

市川は嬉しいに決まつている。それは僕達と一緒にだからではなく、君からもらつたものだからだ。

「まあ、いいか。改めてサンキュな」

保坂は喜んでみせたが内心は僕と同じで、顔では笑つていても実はガツカリしていたに違いない。僕達にとって重要なのは、“なにをもらつたか”ではなく、“誰からもらつたか”なのだから。

大当たりを当てた市川は、僕と保坂を尻目に人一倍喜んだ。ところろがそれを見ていたなつちゃんは、なにかと市川に突っ掛かるようになり、市川は訳も分からず戸惑いながらも宥めては、「はい」、「はい」と、なつちゃんの我が儘に付き合つ羽目になった。

「ママー、ただいまー。久し振りでごめんね」

君は僕達が空いているテーブル席になだれ込む中、別のテーブル席で接客をしていたママに歩み寄つた。

「まー、優和ちゃんじゃない。久し振りー、元気だった？」

「うん。ママも元気そうだね」

「まあね。それしか取り柄がないから」

「そんなことないよ、元気が一番なんだから」

「そうよね。んー、ありがとー、優和ちゃん」

久しぶりに会ったせいかわ、ママは大喜びで抱きついた。

「あら、いいじゃないそれ。似合ってるわよ」

「ほんと？ よかったあ。シユジにもらったのお」

「へー、修司君に」

ママがチラッと僕を見る。

「そっか、クリスマス・プレゼントね」

ママは再び僕をチラッと見て、ニコツとすると、その視線はテーブル席全体に注がれた。

「それにしても、今日は大勢ねー」

「ママ、手伝うよ」

「ダメダメ、今日はお客さんなんだから。座ってて」

しかし時が経つにつれ、君は盛り上がる僕達に、結局“ルージユの優和”へと変身することとなり、みんなにウーロンハイを作ることになった。車で来ている僕にも気を遣って、暇をみてはウーロン茶をそつと注ぎながら。

それを見兼ねて、友花ちゃんとなつちゃんも臨時の店員に変身した。

「ちょっと、ちょうだい？」

“ルージユの優和”にも一段落すると、君は平気な顔で僕の飲みかけのウーロン茶に口を付けた。

「ハー、おいし」

そしてグラスに付いた口紅をさりげなく指で拭くと、ニコツと微笑んだ。

「ありがと」

君は何故か僕のだけ、いつもこうやって口にする。僕もその後を何食わぬ顔で口にはいたが、実はこのことは、僕をそのたびに、

「やっぱ、これって間接キスだよなあ」と、まるで思春期の少年みたいなおことを意識させては喜ばせ、そしてドキドキさせる出来事だった。もう、そんな歳でもないのになだ。

アルコールの入った保坂と市川は、三人の女性達を僕に任せると、気分上々で二人仲よくタクシーの帰路に就いた。そして僕の手では、三人の黄色いしゃが声のルージユの延長戦とばかりに続き、始終FMの音量を飲み込んでいた。

『じゃあね』

「うん、またね」

友花ちゃんとなつちゃんを降ろした後、車内はそれまでがまるで嘘のように静まり返った。

「……どこ行くの？」

僕は無言のまま、半ば強引に君を港に誘っていた。しかし、君もそれ以上訊くことはなかった。

港には、大学生の時、実習で乗船したことのある望海丸が珍しく停泊しており、白と黄色の光を放ち、自らをライトアップしていた。君は助手席でなにも語らず、ただジツとその光を見詰めていた。僕は、もつと長く君との時間を過ごしていたという一心でここに来たのだが、僕の悪足掻きは二人に沈黙を作っただけだった。いつものように話しかければ、なんていうこともないのかもしれないが、何故か今はそれも憚られた。

この状況をなんとかしようにも、なにも浮かばない。僕はそのまま二人して望海丸を見ているしかなかった。

今度はいつ会えるのか分からないのに、優和は福岡に帰ってしま

うのに、このまま望海丸を見るだけだなんて…。

諦めと焦りに、いま一度横を見る。

…優和。

君は一向に変わらない。

僕達の沈黙はさらに続いた。

あ…。

不意に、浮かんでは消えた二文字。告白。

“こんな時に”なのか、それとも“今だから”なのか、その言葉は不意に浮かんで、そして消えた。

もともと僕の中に潜在していた思いではあったが、まさかこの沈黙にあつてその言葉がよぎるとは思ってもしいなかった。

意識すると心臓の鼓動が速くなる。

でも…。

葛藤が渦巻き、手には汗が滲んだ。

「あ、あのさ…」

「ん？」

君が振り向く。

「…帰ろうか」

「…そうだね」

俯いた君の声は小さかった。

「…家まで送るよ」

「…ううん、…駅でいい」

「…分かった」

街はまだ賑わいを残し、駅のロータリーも時間を忘れたかのよう

だった。

僕達の間には、別れを惜しむようなひとときの時間が流れ、

「…じゃあ、…またね」

やがて君は助手席を去った。

優和…。

「優和！」

僕は君の後を追い、呼び止めた。

振り返った君はなにか言いたげな表情を見せたが、そのまま俯いて、

「…ごめん、ここでいい。…ごめんね、修司」

小さな声でそう言い残すと、二度と振り返ることなく、改札の向こうに消えていった。

車に戻ると、車内には君の香りが残っていて、僕に切なさとしみじみを溢れさせた。ふと、主をなくした助手席に目をやると、さっきまでそこにいた君の横顔が目に見えかんだ。

再会

僕ははがきに書かれていない優和の電話番号を覚えてもらおうと、友花ちゃんの携帯に電話をした。できれば五年前のクリスマス以降のことも訊きたかった。

友花ちゃんとは去年電話で話したことがある。しかし、その時受話器から聞こえてきた声は、僕の知っている聞き慣れた声とは少し違って、囁くような、か細い声だった。何処か暗く、落ち込んでいるような疲れた声だった。

友花ちゃんは物凄く明るい声で受話器に出る娘だったから、あの「もしもし」が耳に残り、少し気になっていた。

「もしもし、友花だよ。シユジシユジ、久し振りだね」

去年とはまるで別人のような、いつもの友花ちゃんの声に、僕は拍子抜けした。

「お、遅くにごめん。あのさ」

「アハハハハ。やだあ、シユジシユジ、『お』って、どもってるし」

僕の言葉は友花ちゃんの笑いに遮られた。

「あつ、もしかして緊張してる？」

「そ、そんなことないよ」

「アハハハハ。ほら、やっぱり」

僕としては去年のこともあり心配したが、その必要はなかったよ
うだ。

「優和のことでしょ」

友花ちゃんは今の今まで笑っていたかと思っただら、一変して真面目な声になった。

「うん」

「…ごめん、今は話せないの」

え？

「…ごめんね」

「…今は話せないって…、なんかあったの？」

「ううん、なにもないけど」

「じゃあ」

「ごめん」

「…電話番号も？」

「…うん」

「でも、伝えたいことがあるって」

「本当に、ごめん」

「……………」

僕の中に不安がよぎった。もしかしたら伝えたいこととは、思い続けてきた人と結婚するという、はがきをもらって喜んでいた僕にとって絶望的なことなのでは。だからあえてはがきにアドレスを書かなかったんじゃないのか？ と。そして、もしそうだったら、もう二度と会うこともなくなるだろう。やっぱり一方的な片思いで終わるのか、天国から地獄とは、まさにこういうことを言うんだ、と落胆した。

「分かった。…じゃあ、いいや。また電話する」

「あつ、ちよつと待って、シュジシュジ。なんか勘違いしてない？」

半ばヤケになって電話を切ろうとした僕に、友花ちゃんが慌てた口調で呼び止めた。

「なにが？」

「詳しいことは話せないけど、シュジシュジが思ってるようなことじゃないから。だからクリスマスまで待って。お願い」

「…シュジシュジだって、今でも優和のこと、…好きなんでしょ？」

「えっ、なんで…知ってるの？」

「そんなこと真ちゃんもなちも、とっくに知ってるよ」

「…そうだったんだ」

「で、どうなの？」

「え、…うん。…好きだけど」

「だったらお願い」

「まあ、べつに付き合ってたわけじゃないし、待てと言われたら待つけど」

「あのね、シユジシユジ。いつだったか、優和、言ってたよ」

僕の言葉を遮った友花ちゃんは、いつになく静かな口調だった。

「『私は付き合ってるつもりなんだけど、シユジはそうじゃないみたいなの。もしかして優和のこと好きじゃないのかなあ』って。それでもシユジシユジとのデートってなると、その前の日なんか凄く喜んで、よく私に、『明日なに着て行ったらいい？』って、はしやいでたんだよ」

「福岡に移動が決まった時も、『あっちに行っちゃったら、もう会えなくなっちゃうよ』って、涙こぼしてたんだから」

「クリスマスにみんなで集まって遊ぼうって言ったのも、本当は告白するつもりだったの。待っても待っても、シユジシユジが告白してくれないから」

「でも、結局できなかったみたいなんだけど…」

「私ね、シユジシユジが優和のこと好きなの知ってたから、なんで告白しないんだろうって、ずっと不思議に思ってたの」

「あの日、カラオケ店の前で待っていたのも、たえ優和が告白できなくても、シユジシユジならしてくれるって期待してたからなんだよ。なのにシユジシユジだったら…」

「私、すっごく腹が立ってたんだから」

「そうだったのか…。もつと早く話してくれればよかったのに」

「話せるわけじゃないじゃない、勝手なこと言わないで。大体、シユジシユジがはつきりしないからでしょ」

友花ちゃんは今まで抑えていた感情を一気に放出するかのようになを荒げたが、「ハア」と溜め息をつくと、すぐに落ち着きを取り戻した。

「シユジシユジさあ、本気で言っちゃうわけ？ 『付き合ってたわけじゃない』って」

「だってさあ、好きな人がいるって言うから…」

「んなわけないでしょ。優和のシユジシユジを見る目は、シユジシユジへの思いでいっぱいだったんだよ。シユジシユジを見る優和は、『私、あなたが好きです』って顔してたじゃない。私達にだって分かってたのに、シユジシユジ分からなかったの？ ひどおい。私、分かってないの、市川君だけかと思ってたのに…」

あきらかに友花ちゃんの声は、僕に呆れていた。そしてこの呆れは、やがて怒りに変わっていった。

「私達って…、保坂も？」

「そうよ。真ちゃんなんか、『俺には無理だ。優和の中に俺はいない。中ちゃんしか見てないもん。残念だけど仕方ないな』って、それからはずっと、シユジシユジと優和を見守ってたんだよ」

「でも、優和は保坂と帰ってたじゃん」

「だからそれは優和の思いを知るまでだよ。知ってからは別々に帰ってたんだって」

「…保坂はなんでそのことを黙ってたんだろ。言ってくればよかったのに」

「シユジシユジ、子供じゃないんだからさあ」

「…ごめん」

「私に謝ったってしょうがないでしょ」

「そうなんだけど…。でもなんで友花ちゃん、そんなに知ってるの？」

「私だって、知りたくって知ってるわけじゃないの。優和も真ちゃんも、みんな私に相談するんだもん。しょうがないでしょ」

「あのさあ、シユジシユジ。今でも優和のこと好きなんだよねえ。だったら、なんで今までに告白しなかったの？ チャンスは幾らでもあったでしょ？ なんて好きな人がいると聞いて、勝手に諦めちゃうの？ DONDONで待ち合わせしてたんでしょ？ ソフトクリームだって食べ合ったりしてたんでしょ？ 一つのいちごを二人で食べたんでしょ？ それって、デートじゃないの？ 恋人ってことなんじゃないの？ 優和、とっても喜んでたんだよ。なのに…、

なのになんで、『付き合ってたわけじゃない』とか平気で言っちゃうの？ ……これじゃあ、優和が可哀相だよ」

友花ちゃんの声は泣いていた。

さっきまで半ばヤケになっていたはずの僕は、言葉を失った。

僕達六人の関係は、「みんなで集まって楽しく遊びましょう」といった、いわゆるサークルの仲間のようなものだった。暗黙のうち恋愛はタブーとなっていたが、そこは若者同士、恋愛をするなど言う方が無理な話。だから保坂がそうだったように、確かに僕にも告白するチャンスはあった。そして友花ちゃんの言うように、優和を見ていて「もしかしたら…」と思ったことも。しかし、優和にはずっと好きな人がいることを知る僕は、告白してもしも断られたら、僕達二人の関係がギクシヤクしてしまうのではと恐れた。それならば、いつそのままでもいい。ずっと遊び友達のままでもいい。ギクシヤクして、最悪、会えなくなるよりは、たとえ遊び友達でも会える方がいい。会えるだけで幸せなんだと、初めから諦めてしまっていた。片思いでいいんだと。だから優和と二人っきりの時も、「これはデートじゃない。ただ遊んでるだけ」と自分に言い聞かせ、いつも気のない素振りをすることに極力努めたし、自分から優和を誘うこともなかった。ただ、僕の中の“好き”という思いが、優和の「あそば」の声を待ち望み、そしてその声に喜んだ。その声といること。

今だって僕は、このはがきに喜んでる。

もっと早く優和の思いに気付いていたら。僕が勝手な思い込みをしなかったら。僕が臆病者じゃなかったら。僕に…、僕に勇気があったなら、優和を悲しませることはなかった。僕達は今でも一緒にいられたんだ。

僕は過去の自分を悔やんだ。しかしその悔やまれる自分は、時を重ねてもなにも変わらず、今もここにいる。勇気のない臆病者がここに。

どのくらいそうしていたのだろう。受話器を耳に当てたまま、ただボーっと立ちすくんでいる自分に気が付くと、電話はもう切れていた。あの後、僕は友花ちゃんとなにを話したのかよく覚えていない。

「…馬鹿だよな」

「一緒にいたいから、『好き』って言えなかったのに…。そうだったなんて…」

「…ハア」

受話器を置くと、友花ちゃんの、「クリスマスまで待つて」、「本当は告白するつもりだったの」、「の声が脳裏をよぎった。

ん？

「それじゃあ、伝えたいことって…」

でも、それならなんでクリスマスその後、連絡が取れなくなったんだろう。なんでアドレスを内緒にするんだ？ なんで「クリスマス・イブに」なんだ？

話の流れと友花ちゃんの迫力に圧倒され、結局クリスマス以降のことは訊けずじまいだったが、ともあれ、クリスマス・イブの再会は、僕にとつていい結果をもたらしてくれるようだった。

夏が過ぎ、秋が過ぎ、そして冬を迎える。子供の頃に比べると、大人になった今は時間が早く過ぎる。しかし、それでも十二月はまだまだ遠い。

優和、君は今、どうしているの？

早く来い、クリスマス。

期間限定のイルミネーション。永遠の愛を誓い合うには罪深き光たち。あまりに美しいそれらは、聖なるものというよりは、恋人達の今を育むシチュエーションとして彩られ、僕達はその空間を、時間を、ロマンティックと言う。

僕の前を行き交う恋人達、横で寄り添い合う恋人達も、この空間と時間を楽しんでいる。

ロータリーの中心にある巨大ツリーは、そんな二人の世界を照らし、見守っているように思えた。

ロータリー内は整備され、一般車両の駐車が禁止になっていて、もう張り付いている車はなかった。タクシーとバスの領域の中で、送り迎えの車が肩身を狭くしている。

確かに昔と違って混雑していないし、安全なのかもしれない。でも、本当にこれでいいんだろうか。なにか大事なものを忘れてしまっただけではないか？ そこには政治的な難しい背景が絡んでいたからかもしれないが、張り付く車を問題視していたのならば、なぜ最優先してでも、もっと早くに整備しなかったのか。それは、人々もそれまでの状況に我慢ができていたからではないのだろうか。文句はあっても許すことができていたからなのでは。だからその必要がなかったのでは。

混雑するロータリーがいいはずがない。しかし僕は昔のロータリーの方がいい。一見、無秩序に見えたそこは、実はみんながそれぞれに気を付けていた。危険だからこそ、その危険に注意をしていた。みんながみんな、周りに気を配っていた。今思えば、僕にはそれが生き生きとして見えた。しかし整然としているここには、“生”を感じられない。無機質で、何処か他人事の空間に思えてならない。

いつからなのだろう。我慢ができなくなったのは。許すことがで

きなくなったのは。僕もそうなのだろうか。優和はどうなのか。僕は変わってしまったているのだろうか。

柄にもないことを思った自分に苦笑し、コーヒーショップの壁に凭れ掛かって夜空を仰ぎ見ると、瞬くイルミネーションが小さな夜を薄めていた。

DONDONは“コーヒーコーナー”になっていた。

七時十分。既に十分が過ぎた。

なにかあったのかなあ…。

…もしかして、友花ちゃんから話を聞いて、怒って来ないんじゃないか…。

そんな不安を覚えつつも、しかし僕には、たとえ日付が変わっても、ずっと待ち続ける覚悟はできていた。たとえ来ないとしても…。もう、諦めたりはしない。

電車やバスが到着すると、僕の前を行き交う流れは、その方向からの流れが強くなる。もう何度この流れを眺めただろう。優和はその流れを乱すように、雑踏の中を歩いてきた。

ゆっくり、ゆっくり、歩いてきた。

人の流れはそんな優和を避けるようにして追い越していく。

僕はその流れに逆らって優和のもとへと急ぎ、数歩手前で立ち止まった。

「空は青いそうです」「でも、会えなくなっちゃって…」

そういうことだったのか…。

今、具体化されない不安が消えた。

カシ、カシ、カシ、カシ。

パシ。

「あつ、ごめんなさい。私…」

僕の足を叩いて立ちすくむ優和を、僕はギョツと抱きしめた。人目も気にせず、ギョツと。

「優和」

「しゅう…じ？」

初めは戸惑っていた様子の優和も、僕だと知ると抱きしめた。力一杯、抱きしめた。

「…修司、会いたかった」

僕は黙ったまま、何度も頷いた。

会いたかった。誰よりも会いたかった。…涙がこぼれた。

「元気だった？ 驚いたでしょ」

「ちよつとだけ」

「ちよつとだけ？ そうかあ、ちよつとだけかあ」

「優和も元気そうじゃん」

「うん、…なんとかね」

「髪、切ったんだ」

「へん？」

「いや、似合ってる」

「ほんと？ よかったあ」

普通、こういう場合、肘とか二の腕辺りを掴んでもらうんだろうけど、僕達は手を繋いで歩いた。ゆっくりと。

優和の僕を掴む力は強く、僕は頼られているんだと実感できた。

僕は話をしながらも、優和の前の障害物に気を付けた。

ロータリーから延びる路地がある。片側に飲み屋がしばらく続き、もう一方は高いフェンスが立っている。このフェンスの向こうになががあるのか、昔も今も僕には分からない。べつに知りたいとも思わないし、仮に知ったところでたいした感激もないと思う。

昔はロータリーが一杯だと、この壁にもよく張り付いたものだったが、今は当然ここにも張り付く車はない。

僕の知る雰囲気と少し違うのは、やはりイブだからなのか、それとも年月の成せる技なのか、サラリーマンが多かったはずのこの路地は、若者達で賑わっている。

こんなに広がったんだ…。

僕達はやけに広く感じる路地をぬけ、駐車場へと向かった。

「車、新しくした？」

「うん」

「新車の匂いがする。買ったばっか？」

「いや、もう二年になる。あまり乗ってないけど」

「そっか」

「それよりさあ、何処行こうか」

「“おばあちゃんの店”に行きたいな。おなか空いちやった」

「おばあちゃんの店かあ、久し振りだなあ。いいね、行こう」

「あつ、でも、修司、おなか空いてる？」

「昼からなにも食べてないよ」

「よかつたあ。じゃあ、一緒に食べようね」

「ああ。おばあちゃん、覚えてるかなあ」

「覚えてるよ、きつと」

「おやおや、久し振りだねえ。何年振りかねえ」

「僕達のこと、覚えてるんですか？」

「ああ、覚えているよ。今日も一緒だね」

この時間には珍しく、店内に客はいなかった。

おばあちゃん一人で切り盛りしているこの店は、それほど広くない。四人掛けの昔ながらのテーブル席が二つと、奥の座敷にやはり四人掛けのテーブル席が二つあるだけの小さな店だった。

僕達は座敷の窓のある方の席に向かい合って座った。ここがいつもの場所だったからだ。あの頃のように、僕が窓に背を向けて。勿論、この席が空いていない時は別の席に座ったが、優和が、「この窓から見える港って、私、好きなの」と言ってから、この席が二人の定番の席となっていたのだ。

「いつものでいいかい？」

「はい、お願いします」

本日のA定食は刺身定食。B定食はとんかつ定食だった。

「優和はAの刺身とBのとんかつ、どっちがいい？」

「とんかつがいいな」

「うん」

メニューはこの日替わりのAとBの定食のみだが、味は申し分なく、学生相手の店だけあってか、ご飯とおかずの量が半端ではない。それなのに、どちらも六百円はかなり安い。

僕達は決まってこの二つの定食を注文しては、おかずを分け合っていた。これも僕達の定番だった。

「おばあちゃん、私達のこと覚えてたね」

優和はニコニコしながら僕に顔を寄せてそう喜ぶと、僕の背中の港に暗闇の眼差しを向けた。

「船、ある？」

「うん。でっかい貨物船が泊まってる」

「そっか」

僕の言葉に、優和は窓の外を見詰めた。

「夜景、綺麗？」

「うん」

「そっか」

五年振りの会話は、なんとなくギクシャクして終わった。僕は何処を見るでもなく、ただ店内を見渡すばかりになり、優和も視線を上げたり下げたりを繰り返すばかりになった。

「おまちどうさま。A定食はどっちかね」

「あ、はい」

僕は手を挙げた。

「はい、修司ちゃん、A定食ね」

「ありがとうございます」

僕にA定食を手渡すと、おばあちゃんは調理場に戻っていき、今度は優和のB定食を運んできた。曲がった腰で。

「はい、優和ちゃん、B定食」

おばあちゃんは優和の前に定食を置くと、何処になにかあるのか教え始めた。優和はそれを一つ一つ手で確認しながら、「はい」、

「はい」と頷いた。

「ありがとうございます、あばあちゃん」

「いいよ、いいよ」

優和が笑みを向けると、おばあちゃんの優しい微笑みが優和の笑みに注がれた。

おばあちゃんはいつも厚焼き玉子をサービスとして付けてくれた。今日も厚焼き玉子が付いている。おばあちゃんの厚焼き玉子は甘く、ダシが利いていて旨い。僕達の好物だった。

僕が優和の顔を見ると、優和も箸を銜えながら僕を見ていた。

「修司、ちよつとちようだい？」

「うん」

僕達はあの頃のように、おかずを分け合った。

「ふう、おなかいっぱい。ごちそうさまでした」

自分のおなかを軽くポンポンと叩くと、優和は両手を合わせて合掌した。

「ごめんね、待たせちゃったね」

優和は僕がとっくに食べ終わっていたことに気付いていて、今度は僕に合掌した。

「どこ行く？」

あの頃は優和がこう訊いていたのに、今は僕が訊いている。

僕はシートベルトを締めると、フロントガラスの向こうの、でっかい貨物船の光を見詰める優和へ視線を注いだ。

「平たいちに、行く？」

「いいけど、平たいちに行っても…」

「お願い。あの路肩に連れてって」

「…分かった」

「はがき、ありがとう。よく分かったね、住所」

「友花に教えてもらったの」

僕はクリスマス・イブに優和と会ってから一年程して会社を辞め、東京にいた。理由は一つ、優和を今度こそ諦めるためだった。一年も連絡がない。それは終わりを意味しているのだと思ったからだ。しかし東京に出て一人になってみても、なにも解決はしなかった。定職に就こうともせず、アルバイトを始めては二カ月と続かない、その繰り返しの日々だった。三年目にどうにか再就職したものの、

ただ仕事を無難にこなすだけで仕事に対する情熱など微塵も持っていなかった。同僚と酒を酌み交わすこともなく、ただ自宅と会社を往復する毎日だった。

優和のはがきは、そんな荒んだ僕の生活の中に届けられた。

僕は再就職が決まって初めて、保坂と友花ちゃんに東京のアドレスを教えた。親とは必要な時だけ一方的に自分から電話をかけるという方法で連絡を取っていたが、二人とは三年の間、一切連絡を取っていなかったから、電話をした時はみんな一様に驚いていた。保坂達にしてみれば、僕は失踪し、行方不明になっていたようだ。

勿論、親にもこの時ちゃんと教えている。ただ、この時初めて僕の親は自分の息子の真相を知ることになり、僕はこっぴどく叱られてしまったのだが。

車内に流れる思い出の曲。僕は優和のリクエストどおり、車をあの路肩に向けて走らせていた。

「懐かしいね、この曲」

「うん」

なにを話していいかわからない。なにから話していいのかも。話したいことは一杯あるはずなのに、本当はこの時をずっとずっと待っていたはずなのに、僕はそれからずっと黙ったままだった。あのイブの夜のように。

相変わらず僕達には交わす言葉もないまま、ただ時間だけが過ぎていった。

「…着いたよ」

「うん」

優和は小さく頷き、窓の外に顔を向けると、パワーウィンドウを下した。

「気持ちいい」

「ほんとだ」

暖房で火照った顔に、冬の冷たい風が心地よかった。

「ねえ、夜景、見える？」

「…うん」

「綺麗？」

「…うん」

「『うん』ばっかだね」

「うん」

「ほら」

クスツと優和が微笑む。

「…他の場所、行こうか？」

「ううん、ここがいい」

「でも…、楽しくないだろ」

「そんなことないよ。そっかー、綺麗なんだー」

僕の声に優和は明るく振る舞った。

そんな優和を見て、僕はそれ以上続ける言葉がなかった。

優和はパワーウィンドウを上げると、フロントガラスの向こうにある木々に視線を向け、静かに話し始めた。

「ねえ、修司。私ね、本当は修司のこと、もっと前から知ってたの。ルージュで会ったのが初めてじゃないの」

僕はその横顔に振り向いた。言葉には出さなかったが、多分、「えっ」という顔をしていたと思う。

「修司さあ、昔、平沼のバス停に毎朝いたでしょ」

平沼のバス停。それは僕が大学一年の頃、通学に使っていたバス停だった。寮生活をしていた僕が、寮の先輩と後輩の間に存在した、体育会系のノリといった理不尽ともいうべき上下関係に、怒りを抱きながらも従うしかなく、地獄のような毎日を過ごしていた中での

バス停だった。

「…なんで知ってるの？」

「私もそのバス停にいたのよ。修司ったら周りの学生と違って、無言のまま、ただジッと前を見てたの。変な人だなあって、初めは距離を置いて列に並んでただけで、毎朝見てたらなんだか面白くなっちゃって、徐々にだけど修司の近くに寄っていったの。修司の隣に並んだことも何度かあるんだよ。だけどそんなこと全然気にしないで、ただジッと前を見たままだった」

「そうかあ、全然知らなかった」

「そうだよ。修司も私も、お互い知らない者同士だったんだもん。それが当然なんだけど」

何処か遠くを見て話す優和の眼差しは、その暗闇の中で僕を探すと、ジッと見詰めた。

「修司、バスの中で女子高生に席を譲ったこと、ない？」

「…ある」

「それ、私だよ」

「え？」

「一度だけだけど。修司に席を譲ってもらったことあるんだよ、私」

「修司、その時のこと覚えてる？」

「うん、覚えてる。女性に席を譲ったの、あの時が初めてだったから」

「座席に着いたら横に女子高生が立ってて、そしたら、無意識というか、気が付いたら譲ってたんだ」

「その時、私の顔、見た？」

「…見てない」

「やっぱり」

ブランクはあるものの、今日までの僕を見てきてた優和は、少し呆れたように言うと、クスツと笑い、なにかを納得したかのように、「修司らしいね」

そう言って微笑んだ。

「修司のことは真ちゃんかね、お店に来るたびに話してたから知ってたんだけど、でも、それは真ちゃんの友達の中山さんだったのね。それで、今度連れてくるよって話になって、後日、修司がお店に来たの。修司の顔を見た時は凄いビックリしちゃった。だって、ずっと思い続けてた人が目の前にいるんだもん」

え？

じゃあ…。

「でも、相変わらず昔みたいにジーンと前を見たり、俯いたり、なかなか私の顔、見てくれなかったけどね」

「あ、あの時は緊張して…」

「そだね」

優和は再びクスツと笑った。しかしその笑みを残したまま、見えるはずのない夜景に視線を落とすと、その横顔は次第に真顔になっていった。

「…修司」

定まらない眼差しが僕を見る。

「あのね…、私…」

優和の眼差しは確かになにかを決心していた。定まらずとも強い眼差しだった。しかしその一方で、懸命になにかと格闘しているようでもあった。

それがなんなのか、今の僕には胸の奥の奥にまで、痛いほどに伝わってくる。なにを決心し、なにと格闘しているのが、痛いほどに。

そんな優和の姿が、切ないほどに愛おしい。

「優和。俺、優和が好きだ。ずっとずっと、好きだった。…初めて会った時から、ずっと」

「…今まで言えなくて、ごめんな」

今までずっと言えずにいた、たった二文字の言葉を、「好き」という二文字を、僕は初めて口にすることができた。

「…嬉しい」

「…やっと言ってもらえた」

「…よかったあ」

「ずっと…、待ってたんだよ…」

そつと目を閉じた優和の頬に、涙が光った。

クリスマス・イブということもあつて、ホテルは何処も満室だったが、それでもなかには空いているホテルもあつたりする。どうやらキャンセルが出たらしい。

港の見えるシティホテル。この“ホテル サンシティ”のレストランには何度か来たことがある。しかし、全室がハーバービューで特にクリスマスともなると恋人達に大人気のこのホテルは、平日でも宿泊料金がそれなりに張るため、誰もが手軽に宿泊できるというホテルではなかった。だから当然安月給の僕には、レストランのランチが精一杯の場所だった。ただ僕の場合、宿泊料金以前に“恋人”という重大な問題があつたから、そういった意味でもレストランのランチが精一杯だったのだが。

部屋に入ると、港の明かりが薄明るく射し込んで、僕達を優しく照らした。明かりは点けなかった。これで十分だった。

僕達はこれまでの時間を取り戻すかのように、熱く、深く、しかし時には優しく、ゆっくりと愛し合った。

射し込む明かりと二人の汗が、三つのクロスを時より光らせた。

「あつ、修司の心臓の音、聞こえるよ」

「うん」

「…友花から聞いたよ。ごめんね、はがきに電話番号書かなくて」
「べつにいいさ」

優和はためらっているようだったが、まだ火照りを残した身体を僕の胸に預けると、静かに話し始めた。

「…福岡に行つて、…修司に会えなくなつて、…修司の声が聞きたくなつて、…電話しようと思つたの。…でも、私のこと、修司はどう思っているのか分からなかったから、…怖くて、結局かけられなかった。もしかしたら私のことなんて、なんとも思つてないんじゃないかって…。友花は、『だいじょうぶだよ』つて言つてくれてただけだね」

「…初めはね、八月頃だったの。最初は夏バテだと思つてただけで、だんだん辛くなつて、何日か会社を休んだの。良くなつては、すぐに辛くなつて…。そんなことが何回か続いたから、これはおかしいなつて病院に行つたら、…そんなに遠くない将来に失明するつて言われちゃつたの。…あの時はあまりのショックでどうしていいか分からなかった」

「…ずっと、修司に会いたいつて思つてた。まだ見えるうちに修司に会いたいつて。目を閉じるとね、修司の顔が浮かんでくるの。でもね、友花はそれからもずっと、『だいじょうぶだよ』つて言つてくれてただけで、もし、修司に好きな人ができてたら迷惑になつちゃうでしょ。だからなかなか電話できないでいたの。そしたら友花が、『じゃあ、みんなで会えばいいよ。集合時間まで二人で会いなよ』つて、クリスマス・パーティーを計画してくれたの。おかげで、修司に『あそば』つて、電話することができたんだけど、でも修司が私に電話したら、こうなることを知られてしまうんじゃないかと思つて、あの時、『私から電話する』つて言つちやつたんだ」

「私、あの時もう、福岡にいなかったから…」
「そうか、だからクリスマスの後、友花ちゃんに訊いても、『そのうちかかってくるよ』つて、電話番号教えてくれなかったんだ」

「うん。私が友花に頼んだの」

「…私ね、本当はクリスマス・イブのあの日に、告白するつもりだったんだあ。失明したら、もう会えないと思ったから、自分の気持ちだけでも伝えておこうと思って。でも、何度かチャレンジはしてみただけど、なかなか言えなくて…」

「みんなと別れた後、港に連れて行ってくれたでしょ。あの時、もしかしたら修司の方から告白してくれるんじゃないかって、ドキドキしてたんだけど、どうもそうじゃなかったみたいで…。だから最後のチャンスとあって、駅で言おうとしたの。でも…」

「はつきり言えばよかったな。』ずっと前から好きだった。修司のこと愛してる』って…。最後と書いてもだめだった。勇気が出なかったの」

「俺の方こそ、ごめんな。…あの日、俺も本当は告白しようと思っただ。…でも、好きな人がいるのに告白なんかしたら、優和を困らせてしまうんじゃないかと思って、…言えなかった」

優和は僕の胸の中で、「うん」と、言葉にならない声で軽く頷いた。

「あと、…俺、知ってたんだ。その」

「友花に聞いたんでしょ」

「…うん」

僕が告白を決心し、覚悟を決められた理由を優和は知っていた。

「ずるいよな、俺って…」

「ううん、そんなことないよ。だって、ほんとに嬉しかったもん」

優和は穏やかに、「ほんと、修司らしいよね」という目で僕に微笑むと、その眼差しを元の位置に埋めた。

「…それから年が明けて、二月に見えなくなってからは、外出することもなくなつて、一日中、家に閉じ籠るようになったの。覚悟はしてたんだけど、いざ、なつてみるとやっぱりね…」

「…時々、友花が遊びに誘ってくれるんだけど、周りの目を気にしながら友花に誘導してもらって歩くのが嫌で、でも一人で歩くのは

怖くてできなくて、結局友花の手を煩わせて歩いてた。レストランに行ってもグラス倒しちゃうし…。毎日が辛かったんだあ。だからしまいには友花の誘いさえも断るようになってしまった…。」

「それでも、相変わらず友花は遊びに来てくれてたの。でも、本当は誰にも会いたくなくて…。生きているのがね、嫌になってた」

「去年、修司が友花に電話したのはそんな頃だったの。修司のアドレスはちゃんと友花から聞いてたんだけど、そんな状態だったから電話もできなかった…。」

「…そうだったんだ」

僕はそつと優和の髪に手を添えた。

「うん。でも、そんな私をずつと見てきた友花が、ある日、凄い剣幕で泣きながら怒ったの。それで帰り際に、『富士山に登るからね』って言ったの。友花は凄い迫力で、とても断れなかった。友花が帰った後、一人になって、なんで富士山？ って思ってたんだけど、『いつか修司と富士山に登るんだ』って、私が前に話してたことを、友花はちゃんと覚えていたみたいなの」

「大変だったけど、登ってよかったあ。手を引かれながらだったけど、今度は修司と登りたいと思えるようになったし、会いたいって思えるようになったから」

「電話番号を書かなかったのは、歩行指導の人に指導してもらって修司に会うまでに一人で歩けるようになったからなの」

「はがきを送った後、友花が修司に私のことを言わなかったのは、もしも途中で修司の声を聞いてしまったら、すぐにでも会いたくなくて気持ちが挫けちゃう気がしたし、なによりも修司に心配かけちゃうから、私が『内緒にして』って頼んだからなの」

僕は優和の髪を撫でながら、僕の胸に沈める優和の寝顔を見詰めていた。

あの後、僕は優和から、「ルージユで働いていたのは、父親の借

金の返済の手助けのため」だと聞いた。福岡に行つてからは、見知らぬ土地ということもあつて、副業は断念したため、仕送りの金額は減つたものの、それでも親への仕送りは欠かさなかつたという。

そんな中での失明への不安を、そして、失明による苦しみを、瞼を開けばいつでも優和を見ることが出来る僕には、おそらく何十分の一も分かつてあげられないのだと思う。話を聞いて、「大変だったね」と想像するのは簡単だが、しかしそれは、あくまで僕自身の想像でしかなく、現実の厳しさは僕なんかの想像を遙かに超えていたに違いないのだから。

結局、優和の両親は仕送りには一切手を付けず、全額、優和名義で貯金をしていて、借金も自力で返済したそうだ。

自らの借金に加え、突然の娘の病氣。僕が東京でグダグダな生活をしている同じ頃に、優和の両親は現実と戦い、そして優和もまた、底知れぬ不安と苦しみの中にいたなんて……。

それに比べて、僕はいったいなにをしていた？　ただ子供のようにいじけて、拗ねていただけじゃないのか？

僕は、いかに自分が情けなく、軟弱だったか思い知らされた。考えてみれば、僕は「好き」という気持ちばかりで、「一緒にいたい」という思いばかりで、優和の生い立ちも家族のことも知らない。知ろうとも、話もしてこなかつた。いくら遊び友達としても、少しくらいは知つていても不思議じゃないのでは？　なのに僕はなにもしらない。優和の書いた文字を見たのだから、あのはがきが最初だった。

あの頃、僕はなにをしていたんだろう。優和のなにを見ていたんだろう。僕は結果を恐れるあまり、見えているもの、見なければいけないものから目を背け、「今」という時間の流れに、ゆるりゆるりと漂つていたにすぎないのでは？

僕が知っている優和といえは、いつも一生懸命だった。我が儘で、淋しがり屋のくせに強がつて、でも、いつも包み込んでくれるような優しさを持っていた。そして、いつも笑顔だった……。

ん？ そうか、僕はこれまでずっと優和のことを思ってきた。それは事実だ。でも、実はそれ以上に、僕が優和に思われていたんだ。僕なんかよりも、ずっと深い想いで。だからいつも癒されてたんだ…。

きつと、疲れたのだろう。「スー、スー」と、僕の胸から寝息が聞こえてきた。

この優和の寝息は、僕にひとときの安らぎを与えてくれたと同時に、優和への“愛しい”と思う気持ちを、いつそう大きくさせた。

こんな僕を、ずっと好きでいてくれてたなんて…。

…なのに僕は…。

僕は優和の小さく柔らかな手を握った。

もう、離れないと。

平沼の畑が広がる農道。助手席の優和越しに、お茶の製造工場の隣に建つ、三棟の二階建ての寮棟が見える。

懐かしい…。

三棟の二階建ての寮棟。その一番左端の棟の、一階の奥から二番目の部屋に僕はいた。先輩と顔を合わせないように、毎日その部屋に籠っていた。朝と夕の食事の時と、入浴時以外はずっと。息を潜めるようにして。

それでも時々呼び出される。この“呼び出し”は後輩の僕達にとっては“地獄”を意味していた。先輩の機嫌一つで、その“地獄”は軽いものにも重いものにも、どうにでもなるのだ。あそこは理不尽が理不尽でなくなる、そんな世界のある場所だった。

それは大学のキャンパス内でも同じだった。息を潜め、ビクビクしながら辺りをキョロキョロ。先輩に会わないように、先輩に気付かれないように、教室から教室への綱渡りだった。

昼食の時も、前日の下校時に近くのスーパーで買っておいた菓子パンを、先輩がそこにいないことを確認してから、屋上で急いで食べていた。しかし先輩が屋上にいる時は、別の場所を探さなければならず、その結果、適当な場所が見付からない時は、昼食を諦めていた。だから僕はここでの一年間は一度も学食に行ったことがない。キャンパス内での先輩に対する失礼は、即、寮に帰ってからの“地獄”となる。例えば、運悪く先輩に出会ってしまったら、たとえ遠くであっても見掛けてしまったりしたら、その時は、先輩が気付いていようといまいと、そこが何処であろうと、「ちわーっ、失礼しまーす」と、大声で叫ばなければならぬ。これを怠ると先輩への失礼とみなされてしまい、寮に帰ると、何処で知るのが既に寮全体の知るところとなっていて、“地獄”行きになってしまう。

普通の挨拶が認められていない、普通に挨拶をすることが許されない理不尽な世界だった。実に馬鹿げた世界だった。

ここでの一年は、そんな一年だった。

自分の失礼が自分一人の責任であるならば、堂々とこの理不尽に反発できた。喧嘩には自信があったし、先輩とはいえ、べつに怖くなどなかったからだ。

それならば何故、ここまでビクビクしたのか。それは連帯責任になるからだ。誰か一人の失礼が、一年全員の責任になる。僕一人の反発が一年全員の迷惑になるのであれば、息を潜めるしかない。まるで人質を取られているようなものだった。

正直、悔しかった。

翌年度の校舎移転に伴って、僕は寮ではなくアパートに住んだ。寮という空間にいたがために、あの理不尽に耐えなくてはならなかったが、アパートには一般の人も住んでいて、そこにあの寮の理不尽な世界は存在しない。だから二年になってからは復讐とばかりにかつての寮の先輩達をオール無視してやった。擦れ違ってもシカトしまくった。もともと先輩といっても、寮があつての先輩でしかなかったのだから当然だ。

本来ならば優和越しに見えるあの寮棟は、そんな苦々しい思い出の、二度と来たくない場所のはずなのに、今はあの三棟が妙に懐かしく思う。

そういえば、あの寮は朝からお茶のいい匂いがしてたっけ…。

「見えてきたよ、“止まれの十字路”」

「うん。じゃあ、この辺でお願い」

僕は優和に言われていたとおりに、“止まれの十字路”の少し手前で停車した。

「じゃあ、電話するね」

「本当にここでいいの？ 家の前まで送るけど」

「ありがとう。でも、ここで大丈夫だから」

「ごめんね。…朝帰りは、…やっぱりね」

優和がはにかむ。

「…車に、…気を付けるよ」

「うん」

「あー、もしかして淋しい？」

「当たり前だろ」

「すぐに会えるよ」

車を降りた優和は、ホテル サンシティでの一夜の余韻を残しつつ、白杖を器用に使いこなして農道を歩いていった。

僕がどんどん小さくなっていく優和を見送っていると、優和は“止まれの十字路”で振り返って手を振った。僕は見えないと分かっていたながらも、それに手を振り返して答えた。

優和が微笑んだ。

優和の微笑んだ顔を見たのは、これが最後だった。

七月十日。

優和へのサプライズを手に、僕はいつもに増して優和との電話を
楽しみにしながら帰宅した。

まずは留守電を聞く。優和からの留守電を。それが帰宅後、僕が
最初にする行動。なによりも優先されること。

今日の優和はどうか？

「やばっ。留守電セットするの忘れてた」

…怒ってるかなあ。

ネクタイを無造作に緩めただけの、まだスーツ姿のままの僕は、
そのまま優和への電話を急いだ。

プルルルル、プルルルル、プルルルル、プルルルル。

「只今、出掛けております」

「あれ？」

間違えたのか？

そんなはずないんだけど…。

僕は一旦電話を切ると、今度は念入りにチェックしながら番号を
プッシュした。

プルルルル、プルルルル、プルルルル、プルルルル。

「只今、出掛けてお」

やっぱり…。

優和への電話が繋がらない。こんなことは初めてだった。

「もしもーし。優和だよ、おかえりー。今日、どうだった？」

「いつもと変わらないよ。優和は？」

「私？ それがねー」

こんな感じの会話で始まる帰宅後の電話が、今では毎日の日課になっていた。それは優和からだったり、僕からだったりした。

唯一、僕達が会える大事な時間だった。

この日課は決して携帯電話では行われなかった。携帯ならいつでも何処でも好きな時に話ができるのに、仕事に支障を来したらいけないからと、ホーム電話に限定された。

当然のことだが、電話をかけて留守電だったら、“まだ帰宅していない”の合図で、出るまで時間を置いて何回もかけ直すのだ。面倒臭いと思うのだが、優和にとってはそんな時間もまた楽しいそうだから僕留守電には優和の色々な声が記録される。楽しそうだったり、嬉しそうだったり、時には悲しそうだったり、怒っていたり。それが一日の内に色々変化したりもする。

僕の場合は、僕の帰宅する時間には必ず優和は自宅にいたから、かけ直すことはなかったが。

…なにか…あったのか？

一瞬よぎる小さな心配。そんなこと考えてはいけないのに、考えたくもないのに、どうしても悪い方へと考えは巡ってしまう。

本当はなにか急な用事とか理由があつてのことで、心配するほどのことではないのかもしれないのに、僕が抱いた“心配”は猛スピードで自分自身を追い詰めていった。

僕は急いで友花ちゃんの携帯に電話をかけた。

「おかけになつた電話は、電波の届かない場所にあるか」

…なんだよ。

「繋がんねえよ」

電話を切ると、続けて今度は保坂にかける。

「保坂もか…」

じゃあ、なつちゃんだ。

しかし、なつちゃんの携帯も同様だった。

…なんで？

「なんでみんな繋がんねえの？」

優和は携帯持っていないし…。

「ああああ、やっぱり携帯の留守電、入っておけばよかったあ…」

僕は留守番電話サービスを受けていなかった。緊急の用件は誰も留守電には入れず、くだらない用件ばかりしか記録されてなかったから、それでもやっぱり仕事上では必要かとも思ったが、あえてこのサービスを解約していた。だから僕にとっての留守電とは、優和との会話を楽しむホーム電話のものだけだった。そして、それはメールも同様だった。

どうすればいいんだ…。

他に手段を見付けることができないでいた僕は、結局その後も根気強く電話をかけ続けるしかなかった。しかし、優和の家の電話はおろか、友花ちゃん達の携帯にも一向に繋がることはなく、また、かかってくることもなかった。

右往左往する中で、ジタバタするその過程で、いつしか僕はホーム電話の子機と携帯をテーブルの上に並べていた。それがこの状況下でなんの解決策にもならないことは分かっていたが、それは、電話がかかってきた時に、せめて一秒でも早く電話に出られるようにとの思いからの行動だった。心配しながらも、もう、僕にはこれくらいのことしか成す術がなかったのだ。

待つしかなかった。

もう、待つしか。

あつ、携帯の電源…。

「入れんの忘れてた」

「かあ、なにやってんだ俺は…」

「しゅうじー」

…優和？

ハッ。

思わず僕は目を見開いた。

「しまった」

時計の針は僕の知る時間から、五分後を指していた。僕は迂闊にも、このところのハードスケジュールに、いつの間にかうたた寝をしてしまっていた。

「あああああああ、もう。本当になにやってんだ、俺は」
ハア。

度重なる不甲斐無さに、自己嫌悪の嵐。しかしその中には、“心配”という魔物までが同居している。

プルルルル、プルルルル、プルルルル、プルルルル。

やっと携帯が鳴った。友花ちゃんからだった。

…なんだ？ この感じ…

既に大きく成長している“心配”がそうさせたのか、その電話は待ちに待った電話のはずなのに、僕は何故かその着信音に得体の知れない胸騒ぎを覚えずにはいられなかった。

鼓動が急激に強くなる。

「…もしもし」

「シユジシユジ、今までなにやってたのよー」

恐る恐る電話に出た僕の鼓膜を、友花ちゃんの叫びにも似た泣き声が貫いた。

「…どうした？」

「優和が…、…優和が死んじゃった…」

えっ。

ヒックヒックを繰り返して、泣きながら話す友花ちゃんその言葉に、身体中の血流が止まった。同時に冷たい衝撃が全身を駆け抜ける。

なに言ってるんだ？ 友花ちゃんは…。

「今、病院にいるんだけど…」

…嘘だ。なにかの間違いに決まってる。…夢？ そうだ夢だ。何処か遠い世界の絵空事。そう、フィクションなんだ。自分に起きてるんじゃない、誰か別の人のこと…。他人事なんだ。

あまりにも大きな現実。あまりに大きすぎて受け止めきれない。僕の意識は混乱の世界へと迷い込んでいった。“現実逃避”。しかし、友花ちゃんの「優和が死んじゃった」の声は、そんな僕の全身に木霊し続け、決して僕を現実から逃がしてはくれなかった。

「…お願い、早く来てえ」

これが友花ちゃんの限界だった。絞り出すような声を最後に、電話の向こうで泣き崩れるのが分かった。

僕はそのまま呆然と、一点を見据えていた。

早く…、早く行かないと…。

我に返ると、僕は取り急ぎ優和のもとに駆け付けようと車へ急いだ。

既に僕の頭の中からは、プレゼンのことはおろか、明日からのことさえも消えていた。

階段を駆け下りる。エレベーターは使わなかった。しかし、それでも駐車場までの時間がはがゆい。永遠に続くのでは？ とさえ思わせる。

痛っ。

段を踏み外し、踊り場の壁に激突。痛みよりも、もたつく自分への苛立ちが勝る。

早く…。

早く…。

急がないと…。

階段を走り抜けると、僕はやっとの思いで車に駆け寄った。

「修司、大丈夫だよ。ちゃんと待っていてられるから」

「…優和？」

車のドアノブに手を掛けたその刹那、優和の声が僕の足を止めた。
「……………」

振り返っても、そこには誰もいなかった。

脱力感が襲う。気力の消失。そして、思考と行動が停止した。

…約束したばかりじゃないか…。

…これ、やっとできたのに…。

「俺さ、覚えてたみたいなんだ。あの時の優和の声」

「どうしたの？ 急に」

「ほら、バスで優和に席を譲った時の優和のお礼」

「確か、『ありがとう』だったよね」

「うん」

「でも、その一言だけだったし、そんな印象的な言葉でもなかったでしょ？」

「うん。でも覚えてたみたいなんだ。自分でも気が付かないうちにさ」

「俺さ、前にバスの中で優和の顔見てないって言ったじゃん。でも本当は見たのかもしれない。で、優和のこと好きになったのかも。ただあの頃は、そんな気持ちになれるような状況じゃなかったから、すぐに忘れてしまったんだろうけど」

「あの頃、修司、大変だったって言ったもんね」

「うん。ただ、それでもその時の思いは自分の何処かにちゃんと潜んでたんだよ、きつと。だって、ルージユで初めて優和に会った時、優和の声にすつごく魅かれたんだもん。優和の声が俺の好きな声だったんだ」

「ねえ、それってもしかして、修司も私のこと探してたってこと？」

「んー、今思えば、そうも言えるけど、正直、分かんない。でも、『なんでこんなに優和に似た声に魅かれるんだろう。いつからそうなったんだろう』って、ずっと気にはなってた」

「じゃあ、やっぱりそうだよ。あー、なんか嬉しいかも。でも、なんで今頃？」

「分かんない。ふと、そう感じたんだ」
「なるほど」

「あつ、ねえねえ。そういえば、もうじき山開きだね」

「って、話変わったし」

「いいのいいの。修司も私と同じだったってことが分かったから」

「ま、いいけどさ。で、山開きって？」

「ふ、じ、さ、ん」

「あー、そうかあ、もうそんな季節かあ。いいよ、登ろう。前からの約束だったもんね」

「やったー。じゃあ、じゃあ、七月二十日に登ろ？ 修司の誕生日に」

「いいけど、なんでわざわざ俺の誕生日なの？」

「それはあ、頂上でプレゼントをあげたいから」

「そっかあ。でも、それって随分と手が込んでない？」

「まあねえ。で、プレゼントなにがいい？」

「べつになんでもいいよ」

「えー、リクエストないの？」

「え、ああ、じゃあ…、CD…かな。オムニバスの。確か来月発売のはずなんだけど」

「分かった。オムニバスCDね。じゃあ、頂上に着いたらプレゼン
トするから楽しみに待っててね」

「うん」

本当は気持ちだけでなにもいらなかったのだが、僕は自分で買う
つもりだったオムニバスCDをリクエストした。

「なあ、今度の休みに会わないか？」

「んー、会いたいけど、七月二十日まで我慢する。今、修司にとっ
て大事な時だから。それに、その方が楽しみも倍増するし」

ちょうど僕が社運のかかった？ 大きなプロジェクトのプレゼン
を任されて、その準備に奔走していた時だったので、優和は気を遣
ったようだ。

「そうか。じゃあ、七月二十日まで楽しみに待つか」

「うん、お願い」

六月二十一日。毎日のように雨の降る日が続く、誰もが梅雨明け
をいつかいつかと待ち侘びる頃、僕達は約束した。

今でも昨日のことのように甦る。

そしてこの後、僕はある一つの決意を、この七月二十日に贈らう
と決めた。

優和の薬指にこれをはめる。と…。

なのに…。

「なんで…。」

僕は、たった今、帰宅途中に買ってきたばかりのリングを握りし
めたまま、膝から崩れ落ちた。

駐車場のアスファルトが濡れた。

僕はそれでもまだ、実感がなかった。それはおそらく、僕がまだなにも目にしていないことを理由に、僕自身がこの現実を認めようとしなかったからかもしれない。

改札を抜けると、既に友花ちゃんは待っていた。優和の実家を知らない僕を、僕の到着時間に合わせて駅まで迎えに来てくれていたのだ。

友花ちゃんは、遠目からでもはっきりと分かるほどに真っ赤に腫らした目で僕を見付けると、人目も憚らず大きく手を振った。

僕は友花ちゃんのもとへと走った。

「シユジシユジ……」

僕の顔を見るや否や、友花ちゃんの真っ赤に腫らした目から、涙が溢れ落ちた。

そんな友花ちゃんの姿を見て、僕は言葉に詰まった。掛ける言葉がなかった。そしてその光景は、僕の胸に重苦しく鋭利で冷たいなにかを駆け巡らせ、今は触れたくない言葉を導いた。

…現実。

優和の言つとおりは無事プレゼンを済ませてから来た僕は、その道のりがもどかしかった。あの電話から、もう二日が経っていたのだ。

友花ちゃんの話によると、優和は僕にプレゼントするためのCDを買いに行った帰りに、事故にあったということだった。

「…CDなんか、…頼まなければよかつたな」

「そんなに自分を責めないで。…優和が悲しむから」

ハンドルを握る友花ちゃんの横顔は、切ないほどに優しかった。

優和の実家では、通夜の準備で葬儀屋が忙しく動いていた。

僕は友花ちゃんに連れられて、二階にある優和の部屋へと通されると、部屋では優和の母親と妹が優和に付き添っていた。

その横で、優和は自分のベッドに眠っていた。寒いまでに冷え切った部屋の、一番奥まった木洩れ日の射すベッドの上で。

ゆわ…。

現実。

優和の部屋に入るのはこれが初めてだった。あの頃も僕は、一人住まいの優和の部屋を訪れたことは一度もない。そもそも女性の部屋に入ったことのない僕には、ここはまさに未知なる場所だったが、まさか初めての入室がこの時とは思ひもしなかった。

部屋は親しみ馴染んだいい匂いがしていた。僕を一瞬でもこの現実から忘れさせ、癒してくれる優和の香りが、ここにはまだ生きていた。

「あなたが修司さんですね。娘がお世話になりました」

「いえ、僕はなにも…」

「いつも娘が修司さんのこと話してたんですよ。…会ってあげてください」

優和の母親は、優和によく似た微笑みを見せると、優和の顔を覆っていた白い布をそつと捲った。

「優和、修司さんよ。よかったねえ、会いに来てくれたよ」

薄化粧のその顔は、まるで眠れる森の美女のようだった。

心の何処かで、それでも足掻いていた僕の否定は、完全に崩壊した。現実が現実として真実を僕に見せる。現実が真実となって僕を押し潰した瞬間だった。

僕は優和の頬に手を添えた。

「…優和、…遅くなって…ごめんな」

「わっ、シユジのほっぺ、冷たい」

「ね、私は？」

「すぐごく冷たい」

「って、アメあるの分かるぞ。ホラ」

「へへへ」

「こんなに冷たくなっちゃって、あれ着ければ？」

「だってあれ、格好悪いんだもん。でも、どうしても我慢できなくなったら着けるね」

「霜焼けになっちゃうぞ」

「大丈夫。そしたらこうやって温めてもらうから」

「…こんなに…、…こんなに冷たくなっちゃって…、…スキーの時みたいじゃん」

「…待っていてくれたんだね、…ありがとう」

僕は優和の唇に、唇を重ねた。

「…綺麗だよ。…とつても」

涙で、それ以上言葉が出なかった。

僕は富士山の頂上ではめるつもりだったリングを、冷たくなった

優和の左の薬指にそつと飾ると、ただ涙で歪む優和の頬を撫でるばかりになった。

「…あの、修司さん、これ」

「あと…、これも」

妹さんから、CDとメッセージカードを手渡された。

メッセージカードには、決してバランスのいいとは言えない文字が綴られていた。しかしそれらは、僕にとって世界で一番大好きで、一番大切な文字だった。

修司、疲れていませんか？

空は青いですか？

私は修司がそばにいてくれたから大丈夫だったけど、

ここまで私を連れてくるのは大変だったでしょ？

修司、一緒に登ってくれて、ありがとう。

そして、誰よりも誰よりも大好きな修司、

お誕生日おめでとう。

優和

「…お姉ちゃん、修司さんと一緒に登るの、楽しみにしてました」
僕は優和の穏やかな寝顔に、子供のようにワンワン泣いた。

遺影の中の優和は満面の笑顔だった。それは僕と優和の机の上に

いる微笑みと同じものだった。

「これって…」

「優和の机にあったでしょ」

「うん」

「シユジシユジが、『優和に』って、私に送った写真。ご両親がね、…一番いい笑顔だって…、…優和が…、…優和が一番大切にしてたって」

遺影を見詰める友花ちゃんは、涙だらけの顔になっていた。

「…渡してくれてたんだ」

「…うん」

遺影の前に、僕はくしゃくしゃの顔になって蹲った。

ピンポーン。

「はい」

「優和だよ」

え？

それは紛れもない優和の声だった。

なん…で？

だって優和はもう…。

「修司？」

「あ、うん。今開ける」

様々な矛盾と混乱はあるものの、僕は玄関へと急いだ。

ドアの覗き穴には、こっちに向かってニコニコ顔でピースをしている優和がいた。

「優和、…どうしたんだ？」

「えへへ、会いに来ちゃった」

会いに来た？

「ちよつとね、近くまで来たから」

近くまで来た？

「ちよつ…、優和、目…」

僕は優和を指差した。

「ああ、そうなの。治っちゃったみたいなの」

僕を見る優和の視線は、あきらかに自分の意思で僕を見ている。

「…そうなんだ。よかったじゃん」

「まあね」

そんなわけない。

「あ、ここじゃなんだから、中に」

「ごめん…。入れないんだ、…私」

優和は表情を曇らせると俯いた。

「…どうして」

「…行かなきゃならないの」

「行くなって何処に」

「…ごめん」

一つ、二つ、三つと、優和の足元を涙が濡らしていく。

「…ごめんね、修司。私…、約束守れなくなっちゃったよ」

僕を見上げた優和の頬を、大粒の涙が幾重にも伝った。

「やっと…会えたのにな」

優和はそう呟くと、肩を震わせながら僕の胸に顔を埋めた。

僕の胸が濡れていく。

「修司、ごめんね。本当にごめんね」

「…なんで、こんなことになっちゃったのかな、…私」

「がんばったんだけど…、…だめだった」

「優和」

僕は力一杯、優和を抱きしめた。

優和の白いブラウスが濡れた。

あの日、七月十日。それは僕が日帰り出張の、帰りの便のシートにいる時に起きていた。

病院に運び込まれた時には、既に心肺停止状態。なんとか蘇生するも、容体の急変。

僕の知らないところで、こんなに大変なことが起きているとも知らず、僕は携帯の電源を入れ忘れたまま、のんきに優和との“日課”を楽しむべく、家路を急いでいた。おまけにいつもはセットしていく留守電も、この日に限って忘れ、そのことに気付いたのは帰宅後だった。

僕はいつもそうなのだ。肝心な時には、こんな大変な時でさえ、こうなるのだ。

七月十三日、告別式。会社を辞め、連絡の取れなくなっていた市川を除く僕達四人は、優和の家族のご厚意で、火葬の場に立ち会うことができた。

白い煙が青のキャンパスに一筋の道を描く。その道はやがて青に溶け込んでしまい、その行き着く場所は見えない。生きとし生けるものには見ることでできない道の先。優和は今、その道の先へと辿り着こうとしている。

「中山ああ。いつまでも泣いてんじゃねえ。優和が悲しむだろうが。しっかりしろ。」

保坂が僕を殴ったのは、知り合ってから、これが初めてのことだった。

灰になった優和の骨を前にすると、すすり泣く声が何処からともなく聞こえてきた。しかし、僕に涙はなかった。頬に残る痛みが、

今にも崩れ落ちそうな僕の心を支えてくれていたから。

僕は友花ちゃんと共に、真っ白な優和のかけらを納めた。

青い空、入道雲、蝉時雨、黒いまでの濃い緑。見る人が見れば、おそろくなんでもない日常に映るのだろう。でも、僕はこの日常を決して忘れない。

「ありがとう、修司。…もう大丈夫」

僕の腕の中で、優和はまだ涙の跡の残る笑みを向けた。

「お誕生日おめでとつ、修司」

優しい声と、笑顔。

「誕生日？」

「…そつか、今日だった」

「忘れてたの？」

「…うん」

「ごめんね。私がこんなことにならなかつたら…」

「そんなこと…、…そんなことないよ」

優和の「ごめんなさい」の眼差しが痛い。

「あ、ほら、俺つてバカだからさ」

「ほんとに、ありがとう」

優和が再び僕の胸に顔を埋めた。

「…言えて…よかつたあ」

その時、優和から重みが消えた。

「あつ…。修司、どうしよう。時間が来ちゃった」

今にも泣き出しそうな優和の顔が、見る見るうちに薄れていく。

「早いよ、優和」

「修司？」

「ん？」

「私、ちゃんと待っていていられたよね」

「ああ」

「指輪ありがとう。来てくれて、とっても嬉しかったよ」

「ああ」

「あっ」

突然優和がなにかに戸惑った。

「…ごめん、修司。私もう、修司の顔、見えなくなっちゃった。修司の声、聞こえなくなっちゃったよ」

涙だらけの顔が、はにかんだ笑みを見せる。

「優和？」

「修司、私ね、修司に出会えてよかったよ。とても幸せだった」

「今までありがとうね、修司。ずっと、好きでいてくれてありがとう」

「最後に修司の声聞いてよかった。修司の顔見れて嬉しかったよ」

「私、忘れないよ。修司の声も顔も、修司のこと全部」

優和が消えていく。

「優和」

「修司、ありがとうね」

「優和」

「ほんとにほんとに、ありがとう」

「優和ああああ」

優和は残された時間を懸命に話し続けた。僕はそんな優和を前に、ただ頷いてあげることしかできなかった。

優和は消えた。

夢？

眩っ…。

カーテンの隙間から、陽の光が射していた。

「これからお休みになる方も、そしてお目覚めの方も、時刻は四時になりました。七月二十日」

点けっ放しのテレビが言う。

僕はテーブルから身を起こした。

朝だった。

「…そうかあ、今日は誕生日だ」

富士山頂。

夏の賑わいに満ちたここは、久須志神社、浅間大社奥の宮付近では、まるで初詣や縁日などの雑踏を彷彿させる。街に例えるなら、夏の旧軽井沢といったところか？ いや、それもちょっと違うか。とにかく、ここには街ができている。

来る波と行く波、時折それらの波に逆らい、立ち往生する波達が入り乱れる。この波から外れた所では、思い思いに時を過ごす、流れを止めた波がある。休む者、山麓を見下ろす者と、様々だ。

ザッ、ザッ、ザッ、ザッ、ザッ。

「ふう」

ここまで必死で登ってきたとはいえ、自分でも驚くほどのハイペースに、よく高山病にならなかつたものだ和我ながら感心する。しかしさすがに疲れを誤魔化すことも困難になり、僕もこの辺で一休みしようとして、そんな波達の仲間になることにした。

帽子を脱ぎ、首に巻いたタオルで顔の汗を拭くと、ペットボトルの水で喉を潤した。

空は高く、夏の陽射しが肌を刺す。一面に広がる大地が深い青を彩り、その向こうに見えるモノクロの海面がキラキラと無数の輝きを放つ。

そういえば、子供の頃に登った時も、確かこの辺りで休んだような気がする。

確かあの時。

あの時、僕は一つのある体験をした。といつても、不思議な種類のではなく、半径二メートル以内に三人の“シュウジ”がいたというものなのだが。しかし、こんなことは都会でも滅多にないんじゃないかと考えると、やはりあの体験は奇跡だったと思う。ただ、今でも分からないのは、この時一緒にいた若い女性が、坊主頭のシュウジを“さん”で呼び、金髪のシュウジを“くん”と呼んでいたことに疑問を感じたことだ。坊主頭のシュウジさんが、たんにその女性より年上で、金髪のシュウジくんが年下だっただけと考えれば、特になんの問題もないことなのに、何故か未だに吹っ切れないでいる。おそらくなにかが引つ掛かっているようなのだ。

大学生の時には、友達と気象庁・富士山頂測候所から雲海を見たことがある。測候所の表階段を上がると細い通路があり、その通路を進むと船の舳先のように突き出た所に出る。人一人しか立つスペースのないそこからは、一面の雲海が眺められた。驚くほどの強風と、真下にまで押し寄せている雲に身震いしたが、慣れてくると、まるで空の中にいるようで心地よかった。まだ、レーダードームがあり、測候所が測候所として機能していた頃のことだ。

それがいいことだったのか、いけなかったことだったのか。おそらくあの場所は立ち入り禁止だったんだと思う。しかし当時の僕はそんなことなど考えもせず、その場所に立った。

そんな昔のことを思い出すと、僕はここに一人でいることに悲しくなった。この山へは、家族だったり、友達だったり、必ず誰かと

一緒だったからだ。そして、今回も…。
本当はとっても楽しいはずだったのに…。
ときおり吹く風が、そんな僕の心を癒してくれているように思えた。

奥の宮と測候所跡の間にある長い上り坂、通称“馬の背”はきつかった。ただでさえ急斜面で、少し歩いただけでも呼吸が乱れて苦しいのに、しつかりと踏ん張りながら一步を出さないと、ズルズルと滑りだしてしまうからだ。僕の斜め前を登っていた人は、四つん這いのまま後方へと下がっていった。こんな光景を何度も目撃しながら、僕もまた、二度三度とその光景の一部になった。

右往左往しながらどうにか剣が峰に辿り着くと、測候所前の剣が峰の石碑の周りにも小さな街ができていた。誰も考えることは同じのようで、記念写真の街が。

僕はこの街を避け、少し離れた比較的人道りの少ない場所に腰を下ろした。

何処でも一様に疲労の顔で溢れてはいたが、どの顔も達成感や充実感で一杯のいい顔だった。みんないい顔をしていた。

ハア…。

優和、君と登るはずだった僕は、今、どんな顔をしているんだろう…。

「修司、大丈夫だよ」

ふと、風の音と共に優和の声が聞こえたような気がした。

「そうか、…ありがとう」

ここは優和が僕と二人で訪れたかった場所。僕の隣に優和がいる

はずだった場所。それは昨日でも明日でも意味がない、今日だからこそ意味を成す場所。

僕はCDプレーヤーを取り出し、プレイボタンを押した。

優和と一緒に聴こうと思っていたオムニバスCDのイントロが、右耳だけに当てたヘッドホンから流れてくると、涙がこぼれた。

柔らかい風はそんな僕を優しく包み込み、頬を撫でてくれているようだった。

「…ありがとう」

昔、誰かに聞いた言葉。“人間は忘れる動物”。

その人は言った。「人が忘れるのはね、もともとは、大切な人を失った悲しみから、早く立ち直れるようにと、神様が授けて下さった能力だったんだ。そしてそれは、人が生きていく上で必要なものになった。だから人はいつしか忘れていくんだよ。」と。

でも、それは違うと思う。僕が記憶する優和の顔も声も、時間と共に歪められ、臆気な記憶へと風化することの方が、僕には耐えられないから。

我が儘で、淋しがり屋のくせに強がり…。僕はいつもそんな君に振り回されていたような気がする。でも、そんな君の全てを許せだし、好きだった。この思いは今も変わらないし、これからだつてずっと変わらない。

七月二十日、僕の誕生日。一緒に登ることはできなかつたけど、僕は来た。

優和、君に会いたくて…。

優和、そちらはどうですか？

空はとっても青いです。

優和の言っとおりでした。確かに山頂は暑いですね。

YOU

君に会いたくて

なんの変哲もない毎日。よく、「会社と自宅との往復の毎日さ」と嘆く人がいる。僕は嘆きはしないものの、僕もまた、そんな毎日の中にいる。最近では趣味や習い事などに自分の時間を有意義に使う人も多くなったというのに、僕はというと、なにをするにも楽しくはなく、ただ生きているだけの毎日だった。

初めの頃は何度か合コンにも参加したことはあった。しかし、参加した女性に興味が持てず、その場を無難にやり過ごすばかりで、結局虚しさだけを残した。だから今では同僚に誘われても気乗りがせず、一人、帰宅するといった有り様だ。そしてそれは合コンに限らず、飲みに誘われても同様だったから、きつと付き合いの悪い奴だと思われるに違いない。

少しは身体のことを考えて自炊を始めてみたりもしたが、やはり三日坊主で終わる始末。休日も食事に行くかコンビニに行く他は外出することも殆どなく、ごくたまに行くのが本屋とレンタルビデオ屋。

保坂達とも連絡を取ることはない。僕が今のアドレスを教えていないから、おそらく何処にいるのかさえ知らないはずだ。

早いもので、こんな生活がもう七年になる。三十三歳になった僕の唯一の楽しみといえば、今では自宅で飲む一本の缶ビールとテレビ鑑賞といったところだ。

孤独な毎日、退屈な毎日かもしれないが、あの日以来ずっと時間が止まったままの今の僕にはそれでよかった。

あの頃、僕が永遠に続く錯覚した優和との時間、そばに居ることがまるで当たり前のように感じていた日常が、今ではかけがえのない思い出の時間として僕の中に生き続けている。

僕はまだ、優和を引きずっている。

そんなんじや駄目なことは十分分かってる。本当は手段もある。ただ、怖いのだ。行動を起こすのが怖いのだ。僕にはそんな勇氣はない。

なにもせず、ただ思い続けるだけの僕は、ようするに現実逃避をしたいだけなのだ。

ホームページを開設したのは、そんな心境を少しでも変えるためだったが、終わりまで書き上げたものの、逆に悪化させたようだ。だから最近ではパソコンの上でホコリが幅を利かせている。

携帯は仕事関係で自宅にいても鳴ることはあるが、滅多に鳴らないホーム電話が鳴った。

それにしても、同じ電子音なのに古さを感じるのは何故なんだろう。

この時間にこの電話へかけてくるのは母親くらいなもので、それ以外でこの電話が鳴るのはファックスの時くらいだった。

しばらく鳴っている。どうやらファックスではないようだ。

「はい」

「もしもし、シュジ？ 優和だよ、久しぶり、元気だった？ 携帯でもよかったんだけど、お母さんがこの時間なら家にいるだろうって言うから、こっちにしてみたんだけど、どうだった？」

えっ？

「お、おお、久しぶり。どうって、優和だったから驚いたよ」

「サプライズよ、サプライズ」

「でも、よくこの電話番号分かったね」

「お母さんに教えてもらったの」

「なあ、お母さんって、おふくる？」

「そうだよ。前に教えてくれたでしょ、実家の電話番号」

「覚えてたんだ。それにしても、よく教えてもらえたね」

「凄いでしょー」

「うん。でも、どうしたの？」

「どうしたのじゃないでしょ、七年も音沙汰なくって」

「私ね、福岡に行つてからも何度もシユジに電話したんだよ。でも、どこをほつつき歩いてたんだか、シユジったら自宅にいないんだもん。留守電くらいセットしておいてよ。会社に電話しようとも思つたんだけど、迷惑になつちや悪いでしょ、だから会社には電話しなかつたの。それで、しばらくたつて電話したら、『この電話は現在使われておりません』だつて。もう、ビックリだよ。シユジ、私が福岡に行つた年の五月には、もう会社辞めちゃつてたんだね。真ちやんが教えてくれたんだけど、真ちやんも、『営業成績が伸びなくて落ち込んだから、成績が落ちてるわけじゃないんだから気にするなつて励ましてたんだけど、四月に入つてからは全然覇気もなくなつて、成績も落ち込んだから心配したら、五月に入つて何日かしたら突然辞めちゃつたんだよ』って、それ以上のことは知らなくて、私、凄く心配してたんだよ。みんなも、『どうしたんだらう』って、心配してたんだから。もう、会社に電話しちやえばよかつたな」

「ごめんな。実は何カ月も前から成績が伸びなくつて、所長から、『今後のことを考えておけ』とか『代わりは幾らでもいる』とか言われてたんだ。所長とは以前から反りが合わなかつたから、ようは肩叩きにあつたんだな。リストラの対象だつたんだ。でも、それでもなんとか成績を伸ばそうと頑張つてたんだけど、四月に優和が福岡に行つてからは、そんな気力も失せちゃつて、五月に入つて辞表を出したんだ」

「優和から電話が来てたことは、保坂から聞いて本当は知つてたんだけど、残業やらヤケ酒やらで毎日荒れててさ、優和に電話するに

しても、なにを話しているのか分からなくて電話できなかったんだ」「会社を辞めてから、何度か福岡に行こうとも思っただけけど、どんな顔をして会えばいいのかかんなくって、それもできなかった」「バカだなあ、そんな時こそ電話してよ。会いに来てよ」

「んー、でも…、心配かけたくなかったし、そんな自分を見せたくなかったから」

「そうか…。でも、私には見せてほしかったな。結局は心配しちゃうたことだし」

「そうだね、ごめん」

「私ね、シユジが会社辞めたって聞いて、もしかしたら実家に帰ってるんじゃないかと思って、勇気を出して、すぐにシユジの実家に電話したの。そしたら、お母さん、『えっ』て驚いてた。シユジ、お母さんにも辞めたこと言わなかったんだね」

「うん。辞めた理由が理由だし、誰にも相談せずに辞めちゃったから、絶対心配すると思ってさ。次の就職先も決まっていなかったし」

「だめだよ、理由はどうであれ、とりあえずでも親にはちゃんと話さないよ。その時のお母さん、突然のことで、『どうしよう、どうしよう』って、大変だったんだから」

「私だって状況がよく分からなかったから、質問されても答えられないし、ただでさえ緊張しながら電話したのに、ますます緊張しちゃったじゃない。もう、ドキドキだったんだから」

「そうか、ごめん」

「でもね、それから何度か電話してたら、そのうち連絡を取り合うようになったね、今では仲よくなっちゃった」

「ほんとに?」

「シユジ、結局お母さんに半年以上も電話しなかったでしょ。『就職したから』って、電話しても、七年もアドレスは教えなかったもんね」

「うん、まあ。あ、でも、実家にはちゃんと帰ってたよ」

「知ってるよ。お母さん、教えてくれたもん」

「ちょよ、ちょっと待って。いったいおふくろ、何処まで優和に話したんだ？」

「えーとねえ、鉄棒から落ちて骨を折ったことですよ、喧嘩して泣いて帰ってきたこと」

「あつ、そうそう、あとねー」

優和が笑う。

「三年生までオネシヨしてたこととか」

「えー、おふくろ、そんなことまで話したんだ」

「そうよ。他にも、子供の頃から大人になるまでのシユジのこと、いっぱい聞いちゃった」

「でね、お母さん、『子供の頃はあんな子じゃなかったのにねえ。

親思いの優しい、いい子だったのよ。お友達の家遊びに行くとな、いつも、『はい、お土産』って言って、お友達の家で出されたお菓子を一つも食べないで、ティツシユに練るんでもらって帰ってきてたの。初めて遊びに行ったお友達のお母さんから、心配して電話がかかってくるくらいだったのよ。きつと自分一人がいい思いをするのが嫌だったのね。私にも食べさせたかったみたい。帰ってくるからね、私と一緒にパクパク食べてたもの』って言ってた」

「そんなこと言ってた？　ほんと凄いな、よくそこまで…」

「まあね」

「だけどおふくろ、優和のことは一度も言ったことなかったなあ」

「サプライズよ、サプライズ。内緒にしてもらったの。シユジのアドレスが分かったら、電話して驚かせたいからって。どお、驚いた？」

「うん。凄く」

「でしょー」

「あつ、そうそう、シユジ、ホームページ見たよ。“YOU　君に会いたくて”ってやつ。まさかシユジがホームページ持ってるなんてビックリだよ」

「よく見付けたね」

「偶然見付けたの。“雪乃 静の部屋”って。前に言ってたでしょ、雪乃 静って、綺麗な名前だと思わない？」って。だから初めはへえー、シユジみたいな人って他にもいるんだあって思ったんだけど、読んでみると、ルージュとかDONDONとか遊園地とか、えーとそれから、あ、そうそう、スキーとかクリスマス・イブのこととか、私の知ってることばかりだったじゃない。だから、これって絶対シユジだーって、徹夜で読んだの」

「ねえねえ、あのクリスマス・イブのことって、私が福岡に行く前の年のだよ」

「そうだよ」

「だよ。あー、なんか読んでて、すっごい懐かしかったなー。でも、クリスマスのパーティーは、あれが最初で最後になっちゃったけど」

「うん」

「…あの時の海ね、本当は私も穏やかでとても優しい時間に包まれてたんだよ」

「え？」

「あ、んーん、なんでもない」

「それにしても、シユジ、よく覚えてたね。初めてルージュに来た時のこととか、DONDONのこととか。私、忘れちゃってると思ってた」

「忘れるわけないじゃん」

「そっか」

「あ、そういえばシユジ、あの時の写真、まだ持ってる？」

「いつの？」

「遊園地で撮った集合写真。」

「あー、あれ。持ってる」

「あの写真、何度見ても笑えるよね。私ね、今でもあの写真見ると笑っちゃうんだあ」

「俺としては今も昔も笑えないけどな」

「ハハハ、そうだよ。シュジ、あの時困惑してたもん」
「見てたの？」

「うん。まさかそのまま写ってるとは思わなかったけど」
確かに写真の中の僕は、誰もが笑ってしまいそうな奇妙な笑顔を振り撒いていた。

「でもほんとはね、私、実はあの時シュジが手を握り返してくれるの待ってたんだあ」

「ごめん。俺、あの時テンパっちゃってたから……。って、握ってよかったの？」

「当たり前じゃん」

「なんだ、そうだったのかあ」

「そうだ、それとさあ、私、いちご狩りの時、そんなに懸命に食べてた？」

「うん、凄く一生懸命だった」

「うーん、一生懸命だったかあ。ちよっぴり恥ずかしいけど、まっ、いつか」

「そうそう、それからね、友花に聞いたんだけど、おばあちゃんの店、まだあるんだって。おばあちゃんも元気なんだって。また食べに行きたいね」

「そうだね。でも俺達のこと、覚えてるかな」

「覚えてるよ、きつと」

「そうか？」

「じゃあ、今度食べに行こうよ。そしたら分かるじゃない」

「そうだね」

「で、話を戻すけど、それですぐ、お母さんに電話してホームページのこと話したの。そしたらお母さん、次の日にパソコン買ったって、凄いいね。さすが母親って感じだよな」

優和は、意外と忙しく話す娘なのだ。

「機械音痴なのによく買ったな」

「一生懸命使い方覚えたって」

「へー。でもそんなこと俺には言わなかったぞ」

「だって内緒だもん」

「でね、お母さん、怒ってた」

「え、なんで」

「『まったくあの子だったら、親に電話番号も教えなくせに、こんなものは書いてるんだから』だって」

「そうかあ。最近だらなあ、教えたの」

「ほんと、最近だよー」。『修司から電話番号聞いたよ』って、お母さんから電話がかかってきたの二週間前だもん」

「それがさ、就職したての頃は、こんなに長く続くとは思わなかったから、とりあえず三、四年勤めることを目標にして、それで自信が付いたら教えようと思ってただけど、いつの間にか、目標にしてた年数も過ぎてて、結局、係長に昇進したのをきっかけに電話したんだ」

「えっ、ちよっと待って、係長って…。えー、凄いじゃん。うわー、おめでとー」

「ありがとう」

「でも、お母さん、なにも言っていなかったなあ」

「教えてないもん」

「なんで？ こんなにおめでたいことなのに。教えてあげなよ、お母さん喜ぶよ」

「いいよ、照れ臭いし」

「だーめ。明日とは言わないから、絶対に早い時期に教えてあげて」

「う、うん。じゃあ…、そのうちね」

「そのうち？ うーん。まっ、いつか、それで。でも、約束だからね」

「わ、分かった」

「そ、そんなことより、どうだった？ “YOU”は」

「そんなこと？ そんなことって、あのねー」

「い、いや、その…、ごめん」

「もぉ。ま、いつか。うーん、そうだなあ…、面白かったけど、まあまあだったかな」

「まあまあ？」

「だって、ベタなんだもん」

「やっぱり」

「ねえ、シユジ。私達って、遊び友達だったの？」

「え？ そうじゃないの？ …俺はそう思ってたけど」

「そうかあ…」

「なんで？」

「ううん、ちよつと訊いてみただけ」

「それよりさあ、なんで私、目が見えなくなっちゃうの？ そのうえ死んじゃうんだよね、ちよつと複雑だったな」

「まあ、小説だし、フィクションだから、べつにいいんだけどね」

「ごめんな。本当はあんなストーリーにするつもりじゃなかったんだ」

「俺、リストラにあつて東京に来たわけだけど、東京に来ても、いつまでもあの頃のことを引きずってたから、去年、“YOU”を書くことであの頃のことを忘れて、自分の気持ちにけじめをつけようと思つたんだ。でも、書けば書くほど思い出しちゃつて…。そして、あんなとんでもないフィクションを作り出しちゃつてたんだ」

「結局、それでも駄目で…。情けないけど、やっぱり俺には忘れられなくてさ。だから今では、なにも無理に忘れることもないかなあつて、思うようになつたんだ」

「優和が死んじゃうのも、目が見えなくなるのも、俺自身の生活や気持ちを表したつもりだったんだけど…。ほんと、ひどいよな。ごめん」

「んーん。…そんなに重い気持ちで書いたなんて知らなかった。ベタなんて言つて、ごめんね」

「おいおい、そんなにしんみりするなつて。ある意味、自分自身に答えは出せたんだから。そのおかげかどうかわからないけど、係長に

もなれたんだしさ」

「それに、サプライズでこうして優和とも話せたし。だからね、
“YOU”はベタでいいんだよ」

「ありがとう、シユジ。なんか私、そのことを聞いたら、もう一度
読みたくなっちゃったな。また別の気持ちでも読めると思うし」

「そうだ、今度一緒に読まない？」

「そうだね。じゃあ、今度な」

「うん」

「で、他に質問は？」

「うーん…。あ、そうだ。じゃあ、なんで富士山なの？」

「んー、特に深い意味はないんだ。ただ、富士山は好きな山だから、
特別出演のつもりなんだけど、実はこの後、色々ある予定だったん
だ」

「どんな？」

「それは内緒。でもそのうち分かると思うよ」

「じゃあ、楽しみにしてるね」

「おう」

「シユジは登ったことあるの？ 富士山」

「あるよ。小学生の時と中学の時。あと大学の時も」

「いいなー、三回も登ってるんだあ。私も登ってみたいな」

「優和は登ったことないんだっけ？」

「うん、一度も。五合目までなら車で行ったことはあるんだけど」

「五合目までなら、俺も数え切れないほど行ったな。俺も車でだけ
どね」

「本当に好きなんだね」

「まあね」

「そうかあ、優和は登ったことないのかあ…」

「うん」

「じゃあさ、今度登りに行くっ」

「ほんとー？」

「ああ」

「絶対だよ、約束だからね」

「ああ、約束な」

「やったー」

「ああ、なんか待ち遠しくなっちゃった。富士山かあ、早く登りた
いなあ」

「でも、あんな近くにいて、一度も登ったことがないなんてな」

「案外そんなもんよ、近くに住んでると」

「ふうーん、なるほどね」

「あ、そうだ。そういえばさあ、よく私が平沼のバス停にいたの知
ってたね。もしかして覚えてた？」

「覚えてたって、どういうこと？」

「やっぱりかあ。私ね、平沼のバス停に毎朝いたんだよ。毎朝、シ
ュジに会ってたの」

「ほんとに？」

「うん。でも道を挟んでなんだけどね。ほら、“原駅行き”って向
かいのバス停だから」

「本当はそうなんだよな」

「シュジ、誰とも話さないで、ただジーっと前を見てたでしょ。そ
れまでは全然動かないのに、バスが来ると眼だけが動くんだもん。

最初はなんかヤバイ人って感じだったんだけど、毎日見てたら、な
んだか面白くなっちゃって」

「シュジ、あのバス停で、いつも一人だったよな」

「うん」

「もしかして友達いなかった？」

「うん。あの頃は地獄のような毎日で、精神的にも追い込まれてた
から、それどころじゃなかったんだ。でも、今思うと、なんであんな
にビクビクしたのか分からないんだ。もつと楽しく、上手く付き
合えたと思うんだ。完全に理不尽な奴もいたけど、そうじゃない先
輩の方が多かったしさ。まっ、今じゃそれもいい思い出なんだけど

ね

「それって、“YOU”に書いてあった『先輩と後輩の間に存在した、理不尽ともいえるべき上下関係』ってやつね。本当のことだったんだ」

「体育会系のノリってやつな」

「嫌い？」

「今は嫌いじゃないけど、べつに好きというわけでもないなあ。ただ、当時よりは上手く付き合えると思う」

「大人になったってこと？」

「どうだろうね」

「じゃ、そういうことにしよう」

「そういうことって、どういう」

「いいのいいの、難しく考えないで。それよかさー、私ね、バスで席は譲られなかったけど、シュジと擦れ違ったこともあるんだよ。シュジ、びわを食べようとして落としたことあったでしょう」

「…うん。あった」

「私を見ると早足で行っちゃったんだけど、覚えてる？」

「えっ、あの時の女の子は優和だったの？ うん、覚えてる覚えてる。皮を剥いて、さあ、食べようと思ったら、ポロツだろ。そんなもって、コロコロ転がっちゃって参ったよ」

「あの坂道、急だもんね」

「そうなんだよ。やっと追い付いて、もったいないから泥を払って食べたら、犬を連れた女の子が笑ってて、それまでびわに夢中で女の子がいるなんて全く気が付かなかったから、恥ずかしくってさ。

そうかあ、あの時の女の子は優和だったんだあ」

「あっ、そうか、分かったぞ」

「なにが？」

「あの朝の香りだったんだ。ルージユで香った優和の香りは。どっかで嗅いだことあるなーって思ってたんだよ。そうか擦れ違った時に嗅いだんだ」

「『何処か懐かしく、朝をイメージさせる香り』ってやつ？」

「ん、ああ、知ってるね」

「凄いでしよう。でも、なんであの時、あそこを歩いてたの？ 日曜の早朝だったでしょ？」

「朝焼けの富士山を見に行ってたんだ。大学の屋上から、でっかい富士山が頭だけなんだけど、よく見えてさ、好きでよく昼休みにパンを齧りながら眺めてたんだ。それで、朝焼けの富士山を見てみたくなくて、休みの日に忍び込んだんだ。真っ赤に染まるとさあ、いつも見ている富士山が、また違って見えるんだ。それがあまりに雄大に見えて身震いするほどだったんだ」

「ねえ、夕焼けじゃだめだったの？」

「うん。なんとなく何処かが違うんだよな」

「ふううん、なんとなくかあ。でも、これで謎が解けた。私、なんであの時間に山から下りてきたんだろうって、ずっと謎だったんだ。しかも、びわを持ってニコニコしてたでしょ」

「ニコニコしてた？ 俺」

「してたよ。なんか幸せーって感じだった」

「そうかあ。確かにあの坂道を下りながら、途中で実ってる果物を食べるのが唯一の楽しみだったからな、あの頃は。でもそんなに？ バカみたいだな、俺」

「そんなことないよ。シユジの顔見てたら、なんか私まで楽しくなったもん。あー、この人やっぱり思ったとおりの人なんだって思ったら、嬉しくなっちゃって、それであの時、思わずふいちゃったんだ」

「思ったとおりって？」

「面白い人ってこと」

「面白い？ 俺が？」

「うん」

「面白くなんかないよ。臆病なだけだよ、なにに対しても俺は」

「だからそんなことないって。いつだって、ちゃんと優和のこと何

気なく守ってくれてたじゃない。一緒にいて凄く感じてたんだよ」
「街で酔っ払いに絡まれた時だってそうだし、それから、えっと、えっと」

「ほ、他には？」

「うーん…」

「えー」

「と、とにかく、今は残念ながら出てこないけど、凄く感じてたのー」

「そ、そうか。あ、ありがとうな」

「ありがとうは、私の方だよ。だからもっと自分に自信を持っていいよ」

「…うん」

「私ね、シユジが翌年度から別の校舎に移るって聞いた時、もう、あの人には会えないんだって、凄いシヨックだったの。だからルージユで会った時は、ほんと信じられなかった。シユジったら、俯いてばかりでなかなか優和の顔見てくれなかったけどね」

「まあ、それはそれで、なんか懐かしかったんだけど、シユジっばくてさ。でも、内心はどうしようって思ってたから、やっと見てくれた時は、ほんと嬉しかったんだあ」

「そうなんだよな、どうも俺は面識のない女性を前にすると駄目なんだよなあ。見られてると思ったら緊張しちゃってさ。だから坂道で会った時も、実はちゃんと顔を見る余裕なんてなかったんだ」

「やつぱりそうだったんだ。でも、ほんとシユジらしい」

「私ね、土曜日が来るの、すっごく楽しみだったんだよ。あの頃、よく飲んで歌ったよねえ」

「覚えてる？ 二人で一晩に百曲近く歌った時のこと」

「うん。あの時は保坂も他のお客さんもいなくて貸し切り状態だったから、調子に乗って歌いまくったんだよな」

「そうそう、ママもひとネエも呆れてたよね。でも、あれからだよ、二人のシユジを見る目が変わったの。朝起きたら、『修司君って、

本当はああいう人だったんだあ』って、ママ、驚いてた」

「ハハハ、あの時はなんか吹っ切れたんだよな、なにかが」

「確かにそんな感じだったよね。実は私もあれにはビックリしてたんだ」

「結局酔い潰れて、二人してルージユで一泊だもんな。俺もビックリだった」

「そうそう、私が起きた時にはもういなくて、ママに訊いたら、ペコペコ平謝りして大慌てで帰っていったって」

「でも、シユジの別の一面が見れて嬉しかったな」

「あー、思い出したら、また遊びに行きたくなっちゃった。今度はシユジと一緒にね」

「そうだね。って、え、どういうこと？ 遊びにって…、もしかして今もルージユに行ってるの？」

「うん、たまにね」

「最初はシユジのことでママに電話したんだけど、次第に遊びに行くようになったの。真ちゃん達にもよく会うよ」

「そっか」

「そっか、じゃないよ、ママも真ちゃんも心配してたんだから。大変だったんだよ、ママなんか電話でシユジのこと知らせた時、大喜びで」

「みんなに迷惑かけちゃったね」

「ほんとだよお。でも真ちゃんも友花達もみんな喜んでたから安心して」

「そうかあ…。じゃあ、今度時間作って会いにいかないとな」

「ルージユで？」

「そうだな」

「その時はシユジのおごり？」

「ん？ ああ、まあ、な」

「じゃあ、またみんなまでパーツと飲み明かす？ シユジの昇進祝いも兼ねて」

「俺のおごりで俺の昇進祝いか？」

「そうよ」

「まあ、それも仕方ないか」

そうなんだ、僕達の原点はあそこにあっただんだ。確かに優和とは DONDON で待ち合わせて色々な場所に行った。でもそれ以上に僕はルージユに足を向けた。それは、そこにいつも優和がいたからだ。二人きりにはなれなくても、優和との時間がそこにはあり、その時間を求めて、僕は毎週そのドアを開けた。今思えば、僕が唯一いつもは表に出さない自分を、なんの気兼ねもなく出せた場所。それがルージユだった。優和と二人きりの時も、僕はそんな自分を出したことはない。何故なら、僕にとってその時間の優和は恋人だったから。だからこんな僕でも少しは格好付けて、クールを装っていた。しかし、ルージユにいる優和は家族だった。仕事が終わって帰宅すると、いつも待っていてくれる最愛の人だった。

ルージユが僕にとって、そんな大切な場所だったなんて思ってもみなかった。

「シユジ？ どうかした？」

「んーん、どうもしないよ」

「あー、なんか懐かしいな、あの頃が。話聞いてたら懐かしくなっちゃったよ。楽しかったもんな」

「でしょ。だから絶対に行こうね」

「ああ」

「ねえねえ、それとさあ、私、もう一度軽井沢に行きたいな。シヨッピングしたい」

「どうしたの？ 急に」

「ん？ んー、一応、『行こう』つながりってことなんだけど。だめだった？」

「いいや、いろんな意味で駄目じゃないよ。じゃあ、今度行こう」
「ほんとー、約束だからね」

「ああ」

「あ、でも、やっぱり最初は平たいがいいな。また一緒に夜景見よ？」
「そうだね」

ここまでで、いったい僕はいくつの約束をしたんだろう。正直、覚えてない。でも、優和のために全部の約束を叶えようと思った。
「私ね、あの頃、本当は真ちゃんじゃなくて、シユジと一緒に帰ってたかったんだよ、知ってた？ いつか、『送っていくよ』って、一緒にのタクシーに乗せてもらえるのを、タクシーのそばまで行って、見送りながらいつも待ってたんだあ。シユジ、一度も言ってくれなかったけどね」

「そうだったんだあ、知らなかった。ほんとに俺も一緒に帰りたいたい、ずっと思ってたんだけど、保坂がいたから遠慮してたんだ。あいつ優和のこと好きだったから」

「真ちゃんだけ？」

「いや、市川もだけど」

「そうじゃなくって、シユジは？」

「えっ、ああ、まあ。…うん。…俺もだけど」

「俺も？ 俺も、なに？」

「なについて、俺も好きだったけど」

「だった？ じゃあ、今は？」

「も、もちろん、…今も」

「もう、ちゃんとやって」

「う、うん。…じゃあ」

「スー、ハー。スー、ハー。」

「ん、んんん。…優和が好きだ」

成り行きとはいえ、これが僕の生まれて初めての告白となった。

「…やっとなんか」

優和が呟いた。

「えっ、なに？」

「ごめん、独り言。なんだ、そうだったんだ。私ね、シユジのブレキランプ五回点滅の意味、本当はそうなんじゃないのかなーって、

ずっと思ってたんだけど、そっか、失敗しちゃったな」

「失敗って？」

「ううん、なんでもない」

「なんか気になるなあ」

「気にしない気にしない」

「『気にしない』って言われてもなあ…。まあ、それならそれで気にしないでいるけど」

「そうそう、気にしないでいて」

「うん。じゃあ、そうする」

「うん」

「あ、そうだ。俺、優和に訊きたいことがあったんだ」

「なーに？」

「優和はなんでルージュにいたの？」

「どうして？」

「“YOU”を書いていて、ふとそう思ったことがあったんだ」

「うーん、特に理由なんてないかなあ。親も借金してないし」

「まあ、小遣い稼ぎってとこね」

「小遣い稼ぎかあ」

「ガツカリした？ ドラマチックじゃなくて」

「いや、べつにそういうことじゃなくてさ、優和がルージュにいなかったら、会えなかったわけだからさ」

「うそよ、うそ。ごめんね」

「本当はね、家の建て替えの足しにしようと思ったの。大学の校舎移転で空き部屋になっちゃうから、大家を辞めて家を建て替えようって話になって。うちって東洋荘の大家だったから」

「えーっ、優和って、東洋荘の大家さんの娘なの？ 俺、東洋荘にいたんだよ。大家さんにも何度も会ってるよ」

「えー、そうなの？ あっ、じゃあ、やっぱりあの三棟の二階建ての寮棟って、東洋荘のことだったんだ。私、そうなんじゃないのかなあとは思ってたんだけど、ほら、あの辺って、そういう寮って結

構あるじゃない、だから。なんだ、そうだったんだあ」

「ごめん。俺、東洋荘での毎日を地獄って…」

「いいのいいの。実は私もあの寮は好きじゃなかったから」

「なんで？」

「だって、シュジの言うように異常だったじゃない、あそこの人達って。『ちわーっす、失礼します』って、朝も昼も夜も、バカみたいに大声でさ。私の部屋まで聞こえてきたんだよ、信じられる？

だから、『もう、大声出さないでよ』ってムカついてたんだあ。あんな大声はうちくらいだったから、もう近所迷惑もいとこだったし。しかもそれが学校でもなんでしょ」

「…ごめん。多分、俺の声も聞こえてたと思うんだけど…」

「うっ、そ、そうだった。…ごめん、シュジ」

「いや、べつにいいんだけどね。事実だから。で？」

「で、でね、最悪だったのは、新入生歓迎コンパの時なの。もう、ただでさえうるさいっつたらないのに、翌日なんか、もつとひどいんだから。食堂や敷地内のあっちこちで吐いた跡があっつてね、物凄くお酒臭いの。だからそのたびに日曜を返上して、ママと妹の三人で掃除して回ったんだよ。私も妹も、『うえ、うえ』、『ゲー、ゲー』言いながら掃除したんだから。毎年毎年、ほんとにいい加減にしてよって感じだったよ」

「あー、もう。思い出すだけで寒気がするよ」

「…ごめん。多分、俺もそこにいたはずなんだけど…」

「うぐぐ、そっかあ」

「ああああ、私って、もう」

「べ、べつに気にしてないから…」

「…ほんつとにごめん、シュジ」

「う、うん…」

「…ねえ」

「ん？」

「その時…、もしかしてシュジも、…吐いた？」

「いや、俺は吐かなかったけど」

「…なんだ、そっか」

「…シユジのだったら、べつに構わないんだけどな」

「え、なに？」

「ううん、なんでもないなんでもない」

「あつ、でも私、ルージユで働いてたんだ」

「そ、そうだね。よくトラウマになんなかったね」

「ほんとだね。ハハハ、そうだったー、そうだったー」

「あー、でもなんで会えなかったんだろ。そんな近くにいたのに
本当に、優和は意外と忙しく話す娘なのだ。」

「うーん、それは多分、普段の俺は先輩と出くわすのが嫌で部屋から出なかつたし、大家さんを訪ねても、優和のいない時に訪ねたかいても部屋にいて、俺の声に俺だと気付かなかつたからじゃないかな。だってその頃は俺の声知らなかつただろ？」

「そうかあ、残念だなー」

「でもいいじゃん、会えたんだから。結果オーライでさ」

「まあね、そうなんだけど」

「…と、ところでさ、好きな人には会えたの？」

「うん。電話で、声だけだけどね」

「そっか、…よかつたじゃん」

「うん。やっと会えるようになったから、今度、会う約束をしようと思ってるの。それでもし会えたら、告白しようって」

「…ガンバレよ。…応援してるから」

「絶対だよ。絶対に応援してね」

「あ、ああ」

「やったー。ありがとう、シユジ。よーし、じゃあ、ガンバっちゃ
お」

ピンポン。

「誰か来たみたいだ。ごめんな、ちょっと待ってて」

「夜分、遅くにすみません。今度隣に引越してきた中村と申します。これ、つまらない物ですが…」

「ああ、これはご丁寧にどうも」

「いやあ、それにしても奇遇ですねえ。中村と中山、隣同士で“中”が付くなんて」

「そ、そうですねえ。ははは」

「あ、これね、草加せんべいと狭山茶なんです。中山さんのお口に合えばいいんですが」

「いえいえ、ありがとうございます」

隣に越してきた中村という男性は、話によると埼玉の出身だという。彼はその言葉のとおり、本当に夜分にやってきた。そして、話し好きの性分なのか、初対面の相手と散々話をすると、人懐っこい笑顔を残して帰っていった。

ハア…。

「ごめん、お待たせ」

「んーん、全然」

「なんか隣に引越してきたらしいんだけど、話が長くってさあ」

「話し好きなんだね、その人」

「そうなんだよ。こっこの都合なんてお構いなしだもんな、参っちやうよ。拳句の果てには、茶どころの人間に狭山茶だってさ。笑うよな」

「仕方ないよ。だってその人はシユジがお茶の産地の出身だなんて知らないんだから」

「まあね」

「それに、『味は狭山で止め刺す』って言うし」

「へー、そうなんだ。初めて聞いた」

「飲んでみたら意外と美味しかったりして」

「まさか」

「『悔るなかれ』、だよ」

「そうかあ」

「あつ、そうだ。ねえねえ、今日、誕生日だよね」

「え？」

「三十三歳、おめでとう」

「あ、ありがとう。覚えてたんだあ」

「まーね」

「なんか早いねー。もう三十三だなんて。私も二十九になっちゃったよ。九月には三十だよ、三十。三十路だって。信じられる？」

「十日だったね」

「うん。九月十日。シユジも覚えていてくれたんだあ」

「当たり前じゃん」

「そうかあ、もうそんなになるんだあ。ほんと、早いよな」

「それでね、プレゼント渡したいんだけど、これから会わない？
伝えたいこともあるし」

「これから会わない？」の後は呟きに近く、僕はまたしても話の最後までは聞き取ることができなかった。それでも優和の、「これから会わない？」は、僕に喜びを与えるには十分すぎるものだった。

「これから？」

「そう、これから」

「これからって、日付変わったちゃうぞ」

「急げば大丈夫よ」

「急げばって、福岡は一、二時間で来れる距離じゃないぞ」

「お願いお願いお願い。ねっ、いいでしょ？」

「まあ、明日休みだから俺はいいけど」

「じゃー、約束ね」

「分かった、約束な。でも気を付けて来いよ。って、俺ん家分かるのか？ 迎えに行こうか？」

「ううん、大丈夫大丈夫。ちゃんとお母さんに教えてもらったから。」

シュジは部屋にいて。着いたらチャイム鳴らすから」

「分かった。でも本当に気を付けるよ」

「うん、ありがとね」

ピンポン。

「あつ、また誰か来たみたいね」

「もー、ほんとごめんな、忙しくって。今度はすぐ終わらすから、ちよつと待ってて」

「急がなくていいよ」

こんな時間に次から次へと、いったいなんなんだ？ 今日。ほんとに今それどころじゃないのに。

受話器を置いてインターホンに出ると、インターホンは無言だった。

「なんだよ」

覗き穴から覗いても、そこには誰もいない。

悪戯か？

「もう、ふざけんなよ、こんな時間に」

ムツとしながらドアを開けると、そこには優和がいた。微笑んだ瞳を潤ませながら、オムニバスのCDを持って。

えっ？

その瞬間、僕はムツとしていた記憶すらなくなっていた。

「ねっ、大丈夫でしょ。はい」

優和は携帯を耳に当てたままCDを手渡すと、そのまま僕の胸に飛び込んだ。

僕は優和をギュツと抱きしめた。ギュツと。…僕の時間が動いた。

「修司、会いたかったよ。…ずっと」

「富士山？ また登ったのかよ、飽きねーな」

明けて

おめでとう

保坂も今年こそは結婚しろよ

彼女、待ってるぞ

「って、大きなお世話だっつーの。毎年毎年、写真付きなんかもらっても、俺は全然嬉しくないぞ」

「でも、また大きくなったな。優司のやつ」

に会いたくて

完

YOU

あなた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4662i/>

YOU あなたに会いたくて

2010年10月8日14時38分発行